339
1127

大平洋學寮常務理事　川崎利市著

趣味の日本歴史 全

海外に於ける我が同胞の爲に

始

是日本說之

尊重東之國

沖一義詳中　著史

神魂不老不死

於丕昭

忠孝
一郎

序

三度海外に於ける日本語教育の實情を親しく視察した筆者は、第二世諸君に讀ましめる爲の、眞に適切なる日本歴史の是非必要であることを痛切に感じた。

同時に又彼の地に於て多年教育實際に携わつている、最も權威ある多くの方々から、之が編纂を囑望せられたので、本年六月歸朝するとまもなく、左記要項によつて編纂に着手したのである。

文部省の「尋常小學國史」を骨子として、これに趣味的史實を多く加え、殊に歴史に關係ある漢詩、和歌、俳句の類を多く載せ。日本紀元と西暦とを併記し、我國とゆう文字を日本と改め。漢字には總振假名をつけ。難語句には、解釋を施し。舊假名遣を

廢して、新假名遣とし。躍動的の挿繪を多くして、尙挿繪の一部に說明を加え。其の他出來得る限り平易な言葉をつかつて、讀み易く解し易く、而も趣味津々と湧いて、識らず識らずの中に、光輝ある日本三千年史を、會得されるよう努力したのであるが出來あがつて見れば。

筆者の研究不十分のために、材料の取捨選擇に當を得なかつたことや、其の他杜撰な點も多く、甚だ遺憾に思う次第である。

幸に版を重ねる際には訂正して、完全に近いものとし、なるべく廣く購讀せられるよう切望して止まない。

終りに臨んで

一世を蓋う大文豪德富蘇峰先生、稀世の國士頭山滿先生並に前文部大臣鳩山一郎先生の題字を卷頭に飾ることを得たことは、此の上ない拙著の光榮であつて深く深く感謝する次第である。

紀元二千五千九十六年
西暦千九百三十六年　十月

著者謹識

目次

徳富蘇峰先生題字
頭山滿先生題字
鳩山一郎先生題字

第一　神代……一
第二　神武天皇……三
第三　野見宿禰……一七
第四　日本武尊……一九
第五　神功皇后……二五
第六　仁德天皇……二八
第七　小子部蝸贏……三
第八　佛教の傳來……三三
第九　聖德太子……三四
第十　大化の新政……三八
第十一　奈良の都……四四
第十二　聖武天皇……四五
第十三　奈良の大佛……四六
第十四　光明皇后……四八
第十五　和氣清麻呂……四九
第十六　和氣廣虫……五二
第十七　平安京……五三
第十八　桓武天皇……五四
第十九　坂上田村麻呂……五七
第二十　傳教大師……五九
第二十一　弘法大師……六〇
第二十二　菅原道眞……六三

第二十三　藤原道長……六七
第二十四　平安時代の文化……六九
第二十五　前九年の役……七四
第二十六　後三年の役……七八
第二十七　保元の亂……八四
第二十八　平治の亂……八八
第二十九　平氏の繁榮……九二
第三十　清盛の我儘と重盛の諫め……九三
第三十一　源頼朝の旗上げ……九七
第三十二　平家の沒落……一〇二
第三十三　鎌倉幕府の創立……一〇九
第三十四　源氏の滅亡……一一三
第三十五　承久の亂……一一四
第三十六　北條時頼の諸國行脚……一一九
第三十七　文永弘安の役……一二四
第三十八　北條氏の滅亡……一二八
第三十九　建武の中興……一三八
第四十　尊氏の謀叛……一三九
第四十一　楠木正成……一四二
第四十二　新田義貞……一四五
第四十三　北畠親房と顯家……一四九
第四十四　楠木正行……一五二
第四十五　筑後川の戰……一五六
第四十六　吉野朝京都へ御還幸……一五八
第四十七　足利義滿の僭上……一六〇
第四十八　應仁の亂……一六三
第四十九　群雄割據……一六六
第五十　北條早雲と孫の氏康……一六八
第五十一　上杉謙信……一七〇
第五十二　武田信玄……一七二
第五十三　川中島の合戰……一七四
第五十四　毛利元就……一七七
第五十五　京都の疲弊……一八二
第五十六　織田信長……一八四
第五十七　豐臣秀吉……一九二
第五十八　豐臣秀吉の外征……一九九

第五十九　德川家康……二〇五
第六十　關原の戰……二〇八
第六十一　大阪冬の陣、夏の陣……二一一
第六十二　德川家光……二一六
第六十三　島原の亂……二二九
第六十四　德川光圀……二三二
第六十五　赤穗義士……二三四
第六十六　山崎闇齋と中江藤樹……二三二
第六十七　新井白石……二三六
第六十八　德川吉宗……二三九
第六十九　松平定信……二四四
第七十　本居宣長……二四八
第七十一　高山彦九郎と蒲生君平……二五〇
第七十二　林子平……二五五
第七十三　德川齊昭……二五八
第七十四　蘭學者と開港論……二六〇
第七十五　ペリー來航……二六一
第七十六　安政の大獄……二六五
第七十七　櫻田門外の變……二六七
第七十八　江戸幕府の衰運……二六九
第七十九　孝明天皇の御德……二七三
第八十　大政奉還……二七四
第八十一　明治維新……二八〇
第八十二　征韓論……二八四
第八十三　西南の役……二八六
第八十四　憲法發布……二八九
第八十五　天津條約……二九二
第八十六　教育勅語……二九四
第八十七　明治二十七八年戰役……二九五
第八十八　條約改正……三〇一
第八十九　三十七八年戰役……三〇二
第九十　韓國併合……三一〇
第九十一　明治天皇を偲ぶ……三一三
第九十二　世界大戰と日本……三一七
第九十三　大正天皇を偲ぶ……三二一
第九十四　今上天皇の卽位……三二三
第九十五　最近の內治外交……三二六

第一　神代

國旗は日の丸！
言葉は日本語！
富士山は空高くとこしえにそびえ！
櫻の花はかおる！

これが皇統連綿（天皇のおちすじがいつまでもつづくこと）三千年の長い歴史をもつ、日本の國である。

神代の昔に、伊弉諾尊、伊弉冊尊とゆう二人の神様がお降りになつて、日本の國を立派にお造りになつた。

二人の神様の間に、大勢の神様がお生れになつたが、中でも天照大神は御徳がたいそう高く、恰も太陽が天にかがやいて世の中をてらし、萬物を育てる

いざなぎの尊
いざなみの尊
天照大神

ようであつたので、日の神さまとももうしあげた。

米や麥を作ることや、かいこをかうことや、機を織ることや、御殿を建てることなどを敎えて、すべての人々をおめぐみになつた。

大神の御弟を素戔嗚尊ともうしあげた、嵐の神様と、もうしあげた程あつて、たび〳〵あら〳〵しいことをなさつて、すこしもご自分の國を治めようとなさらず。そのために山の樹はみな枯れて、川の水は乾枯びてしまつた。けれども大神はいつも尊をおかわいがりになつて、すこしもおとがめになることはなかつた。

その後尊の亂暴はます〳〵はげしくなつて、春には田の畔をこわし、秋には折角稔つた穀物をあらし廻るといつた風に、どうにも手のつけようがなかつた。

或の日のこと大神が、神様にお供へになる着物を、織つておられるとそこへ

て、馬を生ながら皮をはいでお投げ入れになつた。

大神はあまりのことにおなげきになつて、天の岩屋のなかにおかくれなされた。世の中が急に暗くなつたので、大勢の神々はたいそう御心配なされて、天安河とゆうところに集まつて、いろ〳〵御相談になつた。

そこで、八咫鏡、八坂瓊匂玉を榊の枝にかけて、神樂（かみさまをなぐさめるためにうたをうたつたり、まいをまつたりすること）をはじめになつて、天鈿命が面白い恰巧をして、歌を唱いながら舞を舞われた。その恰巧があまりに可笑しかつたので、神々がどつとお笑いになると、大神は其の笑聲をお聞きになつて、何事がおこつたのだろうと、岩戸をそつとあけて外の樣子をのぞいてみようとなさつた。そこを、さつきから岩屋の入口で待つていた、手力男命が、力一杯に戸をあけ放し、大神の御手をとつて、おだしもうしあげた。天は始めて晴れ、もとの如く明るくなつて、神々は喜こんで

素戔嗚尊出雲に下られた。

「あな面白し、あな樂し」とうたわれた。（面白しとゆうことばは、これからはじまつたとゆうことである）

（お宮へ注連を飾るのは、大神が岩屋からお出ましになつたあと、二度とおかくれにならないようにするために、はじめたのが今につたわつたといわれている）

素戔嗚尊はその罪をせめられて、出雲におくだりになり、簸川の川上にお出になると、二人の老人が一人の娘を眞中においてさめ〳〵と泣いていた。尊が怪しんで、なぜ泣くのかと、お尋ねになると二人の老人は、

天の岩戸開き

素戔嗚尊の大蛇退治

「この娘は私共の子で、稲田姫ともうします、もと八人の娘がございましたが、この川上に八岐大蛇といつて、頭が八つに尾が八つある恐ろしい大蛇が棲んでいてそのために、毎年一人づゝ呑まれて、あとにたつた一人殘つているこの娘も、今日は又その大蛇のために呑まれて了ふので、それが悲しくて、泣いているのでございます。」

尊はこれを聞いて大變可哀相に思われ、自分が退治してやると仰せになり、老人にいいつけ八つの樽に強い酒を入

れさせて、大蛇の出てくるのを待つておいでになると、俄に空がくもり、恐ろしい響とともに大蛇が出てきて、樽ごとに頭を一つ一つさしいれて、その酒をすつかりのんでしまつた、酔うてそのまゝ眠つた時、尊は物蔭から躍り出で、すらりと十握劍を抜き放つて、ずた〳〵にお切になると、尾の方へいつて劍の刄が少し缺けたので、割いてご覧になると、一つの劍があつた。その上には常に雲がたゞようていたから天叢雲劍と名づけて、早速天照大神に献上せられた、これは後に草薙劍といつて、今、三種の神器の一つになつている。

尊はその後出雲の國の須賀とゆうところに、お宮を造つて、稲田姫と一緒にお住ひになり、いままでと、うつてかわつたやさしい神様となられた。

やくも起つ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を。

（夫婦が籠り住むために多くの雲が、垣のように湧いて來る）

これが三十一文字を綴つた、日本の和歌の一番はじめのものだと傳えられている。

る。

素戔嗚尊の御子に大國主命とゆう神様があつた、父の尊についてその業を興し、農業をすゝめ、醫藥の道をもおさずけになつたから、出雲を中心として中國地方は早くから開けて、その威名は四方に輝いた。

大きな袋をかたにかけ、大國様がきかゝると、

こゝに因幡の白兎、皮をむかれて赤裸……と白兎を助けなされたお話は、この神様のことである。

尚お命の御一族のものは遠い土地を大鋤で突きくずし、太い綱をかけて、「國來よ國來よ」とはやし立てゝお引寄になつたと傳えられている。日本國民は昔から海外發展の大きな考をいだいていたことが明である。

天照大神は、地方にまだわるものが、大勢いてさわがしかつたのを御心配になり、大神の御孫

御神勅をおくだしになつた

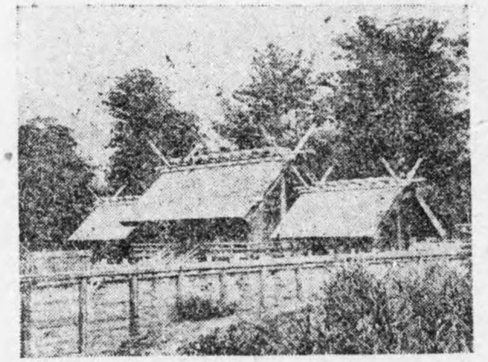
瓊瓊杵尊に日本の國を治めさせようとお考えになり、まず御使を大國主命のところへやり、その地方をさしだすようにおさとしになつた。命は折から出雲の三穂崎で釣をして居られた御長子を早船で呼びよせ、ともに謹んで大神の仰に從つた。

大神は、瓊瓊杵尊を日本へお降になろうとして、尊に向い、

「この國は、わが子孫の王たるべき地なり。汝皇孫ゆきておさめよ。皇位（天皇の御位）の盛なること、天地とともにきわまりなかるべし」

とおうせになつた。これ實に日本建國の大本をお示しになつたもので、天地とともにいつの世までも動くことのない、日本國體の基がこゝに定まつたのである。

御代代の天皇はみなこの御神勅を奉じ、その御心によつて日本國を治めてゆかれた。明治天皇のお下しになつた教育勅語に「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」とおうせられたのも、この大神の大御心をおのべなされたものである。



皇大神宮

三種の神器

大神はまた御手ずから八咫鏡と、天叢雲劍と、八坂瓊勾玉とをお授けになつた。これを三種の神器ともうしあげる。

尊はこの神器をさゝげ、大勢の神々をしたがえ、天の八重雲にのつて先ず日向の高千穗峰におくだりになつた、これを天孫降臨ともうす。

これから御代々の天皇は神器をおひきつぎになつて、皇位の御しるしとせられることになつた。

大神は、神器を尊にお授けになるとき、

海幸彦
山幸彦

天孫降臨

仁勇の三德を示されたことは、まことに尊い事である。

それゆえこの御鏡を御神體（やしろにおまつりしてあるもの）として、伊勢の皇大神宮に大神をおまつりもうし、御代々の天皇をはじめ、日本國民すべてがふかく御うやまいもうしあげているのである。

さて瓊瓊杵尊は木花開耶姫をお迎えになり、二人の間に海幸彦、山幸彦（彦火々出見尊）とゆう二人の神様がお生れになり、一人は海の獵、一人は山の獵

「この鏡を見ること我を見るが如くにせよ」とおうせになつた。

鏡は智慧、玉は慈悲、劔は勇氣で智が上手であつた。

或る時この二人は自分達の獵の道具をお互にとりかえて獵に出かけた。ところが弟の尊は、その釣鈎を魚に食われて失われたので、兄の尊は色々とお責めなされたから、しかたなく、海邊をさまよつていると、そこに老人がいて、早速小さな舟をつくり、尊を乘せて海神の許え送られた。

海神は大小の魚類を集めて問われると、鯛だけが病氣で出席していない。強いて召出されると、その口がはれていたので、これを探らせると、果して失くなつた鈎が出て來たので、早速歸つて兄尊に返した。この親切に感じて兄尊は位を弟尊に傳えられた。

弟尊の御子を鸕鷀草葺不合尊ともうしあげる。

天照大神—天忍耳尊—瓊瓊杵尊—彦火火出見尊—鸕鷀草葺不合尊—神武天皇

第二　神武天皇

鸕鷀草葺不合の尊の第四番目の御子を神武天皇ともうしあげ、小さいときから大へんにかしこいお方であらせられた。天皇が四十五歳になられたとき、兄様方やお子様方をお集めになつて、

日本の國も西の方はよくおさまつているけれども、東の方にはまだわるものどもがおうぜいいて、たいへんさわがしいとゆうことであるから、これらをうち平げて、人民を安心させようと思うがどうであろうか、とおうせになつた。兄さまがたや、お子さまがたは、たいそうおよろこびになつて、みなさんせいせられたので、さつそく船の用意をせられ、大勢の兵隊をひきつれて、東の方ごせいばつへと日向の國を出られた。

瀬戸内海に船を進め、道の序の國々の悪者どもを平げ、ながい間かゝつて遂に難波（今の大阪）の地におつきになつた。

天皇は河内から大和（奈良縣）へ入ろうとなさつたとき、大和の登美の頭に長髓彦とゆうものがあり、早くからこの國にお降りになつた天神の御末饒速日命を奉じて、御軍をふせぎ、其の勢が中々強くて遂に皇兄五瀬命は流矢（それた矢）にあたつてひどくお怪我をなさつたので、天皇はやむなく道をかえて紀伊から進もうとせられたが、その途で五瀬命は遂に薨ぜられた。

かくて天皇は熊野にお出でになり、道もない山中をふみわけてお進みなされた。幾重とも知れぬ嶮しい山坂、晝尚お暗い木の間谷の間、ひととうりのお苦しみではなかつた。しかし天皇は、すこしもごしんぱいなさらなかつた。そのとき八咫烏が飛んできて道案内をしたので、天皇は大いによろこばれ、兵士をはげまして、道を開かせながら、とう〳〵大和におはいりになつた。

そこに兄猾、弟猾とゆう兄弟の悪者がいた。弟はすぐ降つてきたが、兄は中

ふたゝび長髓彦をお攻めになつた。

〳〵々従わない偽り降つて新しい宮をたて、そのなかに恐ろしい仕掛をして天皇をお招きもうした。しかしその計はすぐあらわれて、兄猾は追いこめられ、自分で造つたわなにかゝつて殺された。天皇は兵士をあつめて、勝つた祝宴を開かれた。

天皇は其の他多くのわるものどもを平げ、ふたゝび長髓彦をお攻めになつた。長髓彦は、今までの悪ものどものうちで一番強く、その上一番澤山の兵隊をもつており、それにまた守つている土地が山や川にかこまれていて、やすやすと攻めることは出來なんだ、いくたびもいくたびも戰つたが、どうしても勝負がつかない、前には日に向つてすゝまれたが、今度は日の御威光を後にうけて、軍せいの元氣はなん十ばいしていたけれども、長髓彦の方には毒矢のしかけをしており御軍はたいへんにごなんぎをなされた。

ある日のはげしい戰のとき、にわかに空がかきくもり、雹が降りだしてあたりが暗くなつた。するとどこからともなく、金色の鵄がとんできて、天皇のお持ちになつている御弓のさきにとまつて電のようにきら〳〵とつよくかゞやいた。そのためわるものどもは目がくらんで、もはや戰うことができなくなつてまけてしまつた。(明治になつて定められた金鵄勳章はこの由來によつたものである。)

饒速日命は長髓彦がいくら

神武天皇長髓彦御征伐

いつても物の道理がわからなかつたため、とう〳〵長髓彦を殺して降參せられた。

こゝにおいて天皇は、宮を畝傍山の東南にあたる橿原にお建てになり、はじめて御即位（天皇の御位におつきになる）の禮をおあげになり、萬歳をお祝もうした。

この年は日本の紀元元年であつて日本の紀年を數える始である。そうして二月十一日はまたこのめでたい日にあたるので、日本國民はこぞつて、この日に紀元節のお祝をするのである。

天皇はまた御孝心の深いお方で、御先祖の神々を烏見山におまつりになつて天照大神のお定になつた日本帝國の基を、ます〳〵固めて、ついにおかくれになつた。

四月三日の神武天皇祭はこの日にあたるのである。

明治天皇御製

橿原の遠つ御祖の宮柱建てそめしより國は動かず。

（神武天皇が橿原の宮で天皇の御位におつきになつてから、日本國はしつかりとして動かない）

第三　野見宿彌

第十一代垂仁天皇の御代に當麻蹶速とゆう大層力の強いものがいた。蹶ることが速かつたので、力比べをしようとして出る人も出る人もみんな蹶倒されてしまつた。すると蹶速は、

「日本中で俺に勝つものはない」といつて威張りちらしていた。

このことがいつの間にか天皇のお耳に入つた。そこで天皇は、「誰か蹶速と力比べをするものはないか」と仰せられた。するとお側のものが

野見宿彌が蹶速を殺した

「出雲國に野見宿禰とゆう力の強いものがおります」ともうしあげたので、天皇は早速宿禰をお召しになり、

「蹶速と力比をするように。」と仰せつけになられた。

二人は合圖をまつて立上つたが、まるで龍と虎が爭つているようであつた。高いところには天皇をはじめ多くの方々が手に汗を握つて見ている。

蹶速は立ち上るやいなや、いきなり、宿禰を蹶倒そうとした。しかし宿禰はその手には乘らない。うまく體をかわし、隙をねらつて蹶速の脇腹目がけて、エイッとばかりに蹶上げた、するとさすがの蹶速もアッといつたまゝ血を吐いて死んでしまつた。御覽になつていた、天皇を始め大勢の方々は一度にどつとおほめになつた。

相撲のはじまり

けれども宿禰は少しも自慢したり、威張つたりせなかつた。天皇は宿禰に蹶速の領地を賜つて永くお可愛がりになつた。相撲はこのときからはじまつたとゆうことである。

宿禰はまたそのころ尊いお方のお崩れになつたとき、お側に仕えているものが、一緒に殉死していたのを、土で作つた人形を生きたものゝ代りに埋めることにするように天皇にもうしあげた。

第四　日本武尊

神武天皇が大和におうつりになつてのち、九州の地はだん〳〵わるものが多くなつて人民を苦しめるようになつた。

第十二代景行天皇は、御みずから御征伐せられて、一旦平定したのであつたが、暫らくたつてまた九州の南の方に住んでいる熊襲がそむいたので、天皇は御子の小碓尊にこれをお討せになつた。

尊は時に御年僅に十六で、お姿は女の如くやさしくあつたけれども、御力は

日本武尊川上のたけるを殺す

二〇

たいそう強く荒々しい御氣性の御方であつたから、早速仰せをうけて九州におでかけになつた。

熊襲のかしら川上のたけるの住家は、三重に兵隊がとりまいて守りをかためている。ちようどそのとき新しい家ができあがつたので、大勢のものが集まつて酒を飲んで樂しんでいた。

尊は女の着物をつけ、頭の髪をとき女の御姿になつて、外の女に混つてまぎれこまれた。

たけるは尊の御器量が大へんよかつたので大層喜んで、自分の近くに坐らせた。みなが酒に醉つた頃を見はからい、懷から懷劍をとりだしになると、いきなりたけるの胸を刺しとうしになつた。不意をうたれた、たけるはたいへん驚いて、「一體あなたはどなたでございますか、」

「あゝ、それが聞きたいのか、自分は天皇の皇子で小碓尊とゆうものである、天皇の命令によつてお前達を征伐にきたのだ」

「なんとお強いことでしよう、あなたは實に日本一の強い御方です、失禮でございますが、今私がお名前をさしあげます、どうかこれからは日本武尊と御なのりなされよ」ともうしあげて息が絶えた。尊はそれから御名をおあらためになり、めでたく大和へお歸りになつた。

その後まもなく、天皇は東の國のわるものどもを征伐してくるようにと仰せつけになつた。

わるものども火を四方にはなつ

日本武尊が御劔をぬいて草をなぎはらわれた

二二

そこで尊は伊勢の皇大神宮に參詣し、御叔母の倭姫命から天叢雲劍と御袋とを授られて喜び勇んで東の國へお向いになつた。

尊が駿河の國におつきになつたとき、この地のわるものどもは僞り降つて、鹿狩をするからと廣い野原にお誘して、急に四方から火を放つて尊を害しようとはかつた。尊は驚かれて、すぐ御叔母の命から頂いた御袋から火燧石を出して火を切り向火をつけられたので、かえつてわるものどもが自分のつけた火にやかれて、すつかりほろぼされてしまつた。此の時尊は天叢雲劍をぬいてあたりの草を薙ぎはらつたので、これよりこの御劍を草薙劍ともうしあげることになつた。

草薙劍の由來

尊は更に進んで相模にお出になり、上總の方へ渡ろうとせられたとき、不意に海が荒れて御船が危くなつたとき、弟橘媛は尊の御身代りとなつて、海の中へ飛び込まれたので、荒れ狂つていた大浪も急におだやかになつて御無事に上總へつくことが出來た。

蝦夷をお平げになつた

尊はなおも軍を東にお進めになつたが、蝦夷（昔東の方に住んでいたわるものども）は御勢におそれて降參した。

御歸りの途碓氷峠にて海上を望まれ、弟橘媛のことを思いいだされて「吾妻はや」とお歎きなされたので、これから關東の地方を吾妻と呼ぶようになつたとゆうことである。

かくて尊は尾張の國までお歸りになつたとき、近江の伊吹山の賊を征伐のため神劍を一時美夜受媛におあずけになつてお出になつた。

不幸にしてこのとき御病を得られたので、やむなく引返され、伊勢の能褒野でお薨れになつた。

尊の御持ちになつた神劍はそのまゝ尾張に留められたので、こゝに社をたてゝお祀りすることになつた。これが今の熱田神宮の起である。

尊はとうとい御身で少年の御時から西に東にわるものどもを、お討ちになつて、すこしも御身を、おやすめになるおひまがなかつた。そうしてついに天皇の御位にお即きにならぬうちに、おかくれになつたのである。けれども尊の御てがらにより遠いところまで平いで、世の中はたいそうおだやかになつた。

尊の御子が後になつて天皇の御位にお即きになつた。この御方を第十四代仲哀天皇ともうしあげる。

第五　神功皇后

仲哀天皇のとき熊襲がまた叛いたので、天皇は皇后とごいつしょにこれをお討ちになつた。

そのころ朝鮮には高麗、百濟新羅の三國があつてこれを三韓といつた。なかでも新羅は日本に一ばん近くて、熊襲をおだてあげていたので、皇后はまず新羅を討つように天皇にもうしあげたが、天皇はおきゝいれにならず、熊襲がまだよくしずまら

ないうちに、おかくれになつた。

皇后はそのとき御懷妊中であつたが、武内宿禰と御相談になつて、御みずから兵をひきいて新羅を、お討ちになることになつた。時に紀元八百六十年、西暦二百年であつた。皇后は御髪をあげて男の御姿になり、數百の舟軍をひきいて、對馬にお渡りになり、それから新羅におし寄せられた。

軍船は海にみちくて其の御勢はたいそう盛で、大浪が立上り新羅の國内におしよせたので、王は非常に恐れて、

「われは、日頃東の方に日本とゆう神國があつて天皇ともうす御方がいらつして、

神功皇后の三韓征伐

やると聞いている、これはきつとその國の神兵にちがいない。とてもふせぐことはできない。」といつてすぐ降參し、皇后の御船の前にきて、

「たとい太陽が西から出て、河の水がさかさまに流れ、河の小石が星となるようなことがあつても、決して毎年の貢（こうさんしたしるしにさしあげるしなもの）はおこたりません。」とおちかいもうしあげた。皇后はその願をゆるし多くのさゝげ物をおさめて、御凱旋（いくさにかつておかえりになること）になつた。

そのうち百濟も、高麗も日本に從い九州の熊襲もしぜんにしずまつてきた。

皇后は筑紫にお歸りの後、皇子がお生れになつた、第十五代の應仁天皇である。皇后はながらく攝政（天皇にかわつてせいじのことをとりはからうやくめ）として天皇をおたすけなされた、後に尊んで神功皇后ともうしあげた。また應仁天皇は後世、八幡宮としてお祀りもうしている神様である。

朝鮮が日本に從つてのちは、學問をつたえ、機織や、鍛冶などの職人もつぎ

人民をおあわれみになつた

〳〵に渡つてきて、これらの人々によつて日本國はます〳〵開けた。

はじめ百濟から阿直岐がきて、皇子菟道稚郎子はこれを師としてまなばれた。後に王仁をよびよせられて師とせられたが、この時王仁は論語と千字文とを献上した。これは日本が支那の學問を傳へたはじめである。

これらは全く神功皇后の御てがらによるものである。

第六　仁德天皇

第十六代仁德天皇は應仁天皇の御子である。御弟と三年の間も天皇の御位をたがいにゆずられて、人民が貢物をどちらへ奉つてよいかわからず、こまりはてたとゆうことであつた。

御弟はついにごじぶんで御命を縮められたので、せんかたなく御位に上られ、都を難波（今の大阪）におさだめになつたが、皇居（天皇のおいえ）はいたつて質素な御つくりであつた。

あるとき高い御殿におのぼりになり、四方をおながめになると、民の家々から立ちのぼる、かまどの煙がすくなかつたので、これはきつと不作で食物が足らないためであろうと、ふびんにお思いになり、これより三年の間は税をおさめなくてよいとおうせだされた。そのため宮の中はだん〳〵破れて雨はもり、衣はやつれてきても少しも御氣

仁德天皇が四方をおながめなさるる

におかけにならなかつたほどであつた。

そのうちに豐年がつゞいて、村々から煙が盛に立ちのぼるようになつた、天

人民が喜んで皇居をお造り申しあげた

農業をおすゝめになつた

皇はこれをごらんになつて、「われは、もはや富み榮えた」とおうせられ、人民がゆたかになつたことを、このうえなくおよろこびになつた。

人民は、皇居がたいへんあれくずれていることを聞いて、もつたいなく思い、税をおさめ、また新しく皇居をお造りもうしあげたいと願いでたが、お許しにならなかつた、そののち三年たつて、ようやくお許しになつた。

國々の民は、よろこびいさんでいつしようけんめいに、工事にはげんだので、皇居はわづかの間に美しくできあがつた。

天皇は、なお人民のために池をほり、堤をきづき、橋をかけ、道を通じさせたりして農業をおすゝめになつた。

人々はみな天恩にかんじてそれ〳〵自分のつとめにはげんだので、世のなかがよくおさまつた。

藤原時平

すがる大勢の子供を集めた

高どのに上りて見れば天の下四方に烟りて今ぞ富みぬる。

第七　小子部螺嬴

第二十一代雄略天皇の皇后が蠶をお飼いになられるために、天皇はお側へ仕えていたすがるとゆうものを召して

「よいこを澤山集めて來るように。」と

仰せになつた。ことゆうのは蠶のことである。

すがるは早速仰せをうけて、國々を、

「天子さまの仰せじや、子を出すように、子をだすように。」とふれ廻つた。そして間もなく大勢の子供をつれて御殿へかえつてきた。

天皇は、これをごらんになつて、暫らくは開いた口も塞がらない程であつた。けれどもすがるはすこしも氣づかず、大得意で、

「やつとこれだけ子供を集めて參りました、澤山いるようでも、さて集めると
なると、なか〳〵いないものでございます。お氣に召される子供が居りますで
ございましようか。」ともうしあげた。
天皇は、すがるの間違いを大へんおかしくお思いになられたが、別にお叱り
にもならないで「そうか、よし〳〵」と仰しやつたきり、にこ〳〵お笑になつ
て、ほかには何も仰しやいませんでした。そして御殿の隅に子供の部屋を作せ
て、そこですがるに、子供たちを育てさせられた。小子部とゆう姓はその時天
皇から頂いたとゆうことである。

第八　佛教の傳來

第二十九代欽明天皇の御代に百濟から佛教がつたわつてきた。
佛教は今から二千五百年ほど前に印度に釋迦とゆう大聖（えらい人）が出て、

この世の中を安らかに樂しくしてゆくように説いた教である。
天皇はこれをまつゝてよいかわるいかを大勢のけらいに問われたとき。蘇我
稻目は「日本の國もほかの國々のように祭つた方がよろしゆうございます。」と
答え。物部尾輿は「日本の國は昔から神を祭つておりますのに外國の神をまつ
ると、きつと日本の神の怒をうけます。」ともうしあげた。そこで天皇は佛像を
稻目に賜うてこゝろみに祭らせられた。よつて稻目は自分の家を寺にして祭つ
たところが、まもなく惡い病氣がはやつて人が多く死んだ。
尾輿はこれは佛を祭たので、神がお怒になつたのであると、天皇にもうしあ
げて、寺をやき、佛像を難波の堀江に投げいれた。
こんなにして、佛教は一時すたれたのであるが、一度人々の頭にしみこんだ
佛教のありがたみは、佛像をすてたぐらいではなか〳〵、ぬけきるものでな
く、かくれて信ずるものがだん〳〵多くなつた。

難波の堀江にすてた佛像は後に本多善光とゆう人がみつけだして、それを信濃國にもつてゆき、そこえお寺を建てゝまつゝたとゆうことで、このお寺が今でも有名な信濃の善光寺であるといわれている。

春風や牛にひかれて善光寺　一茶

物部氏が佛像を難波の堀江にすてゝからまもなく、ふたゝび百濟から佛像や、經文がつたわつてきた。物部氏は折角わるい病氣が靜まつているところへ、又そんなものをもつてきて、今度こそどんな災難があるかもしれないとゆうので、前のようにすてようとしたが、今度は蘇我氏の外に澤山の人達がそれに反對したので、こゝに又大きな爭いがくりかえされることになつた。

蘇我馬子は聖德太子を頭におたてして、ついに物部氏を亡ぼしてしまつた。

第九　聖德太子

聖德太子は第三十一代用明天皇の皇子であらせられる。厩の前で御誕生遊ばしたので厩戸皇子と申した。幼いときから人にすぐれてお賢こく一を聞いて十を覺られた。また一時に十人の訴えをきかれて、正しくお裁きなされた程である。

第三十三代推古天皇は女帝（女の天皇）でいらつしやつたから皇子は攝政（天皇にかわつて政治をとりはからう役目）として政治をおたすけになつた。

太子は日本の昔からのならわせをもとにして、朝鮮や支那のよいところをとりいれて、いろ〳〵新しい政治をおはじめになつた。

そうしてついには、十七條の憲法を定めて、官吏も一般の人民も、皆つねに心得ておかねばならないことをお示しになつた。（いまのにつぽんの憲法とゆうのとはちがつている。）

日本はそのころまで朝鮮からのみ色々の學問がつたわつていたが太子のとき

に始めて支那に使をやつてつきあいを、はじめることになつた。その頃支那は隋の世で國の勢がつよく學問もよほど進んでいたので、いつも高ぶつて、ほかの國々をみな屬國（てしたのくに）のようにとりあつかつていた。けれども太子はすこしもおそれず、支那におくられた國書（國から國へやるてがみ）に「日出ずるところの天子書を日没するところの天子にいたす恙なきか（おかわりはないか）。」と對等（同じような）のつきあいをなさつた。

聖徳太子

支那の天子はひどく腹を立てたそうであるが、ほどなく使を日本におくつてきたので、太子もあらためて、小野妹子をつかわし、その後ひきつゞいて、たがいにゆきゝをするようになつた。

太子はまた深く佛教をあがめ、多くの寺をおたてになり、ごじぶんで教をおときになつたりして、ねつしんにお力をつくされたので、これから佛教はだん〳〵日本國中にひろまつた。こうして佛教がひろまるにつれて、建築や其の他の技術なども目立つてすゝんだ。

佛教をおひろめになつた

太子のお建てになつた寺のなかで名高いのは、大和の法隆寺、大阪の四天王寺である。寺を建て、佛像をつくるにつれて、建築、彫刻、繪畫なども大いに進んだ。法隆寺は日本で一番古い建物であるばかりでなく、その建築法や、壁畫は西洋にもたぐいのない程すぐれたものだといわれている。

かように太子は内においても、外にたいしても、大いに日本國の利益をおはかりになつたが、不幸にも御位におつきにならないうちに、御病のためとうと

うおなくなりになつた。御年四十九。世の人々は親を失つたようになげきかなしんだ。

第十　大化の新政（天智天皇と藤原鎌足）

蘇我馬子は物部氏を亡ぼしてから、朝廷で獨勢をふるつていたが、その子蝦夷もまたこゝろよからぬものであつたから、大勢の人民をつかつて生前（いきているうち）からじぶんの墓と子の入鹿の墓とをつくり、おそれ多くもこれを陵（天皇のおはか）といつた。

蘇我氏のわがまゝ

このとき聖德太子の御女は、「天に二つの日なく、國に二人の君はないのに、なぜかようなわがまゝをするのか。」とおういにこれをおしかりになつた。蝦夷の子入鹿は、父にもまさつてわがまゝなことがおうかつた。

其ののち聖德太子の王子の人望あらせられるのを忌み軍をおこして攻め奉つた。王子は獸の骨を御殿において、ひそかにのがれ、家來が宮を燒きもうした。灰の中に骨のあるのをみて御死骸と思ひ一旦軍をかえしたが、王子はとてものがれる道がないとさとつて、御自害あそばされた。それで世の人々はみな憤慨し、父の蝦夷さえ、さすがにこの無道を叱つて「罪のないのに太子の御後を失い奉つた。我が一家も久しゆうはあるまい。」と嘆いたとゆうことである。入鹿はこれにもこりずじぶんの家を宮、その子らを王子とよばせてすこしもはゞかるところがなかつた。蝦夷父子のようなものは、このうえない不忠の臣といわねばならぬ。

入鹿を斬る

このありさまをみて、どうしても入鹿父子をほろぼそうと決心したのは中臣鎌足であつた。

中臣氏は天兒屋根命の子孫で代々神々の祭をもつて朝廷に仕えていたのであつた。僞り病といつてひそかに蘇我氏をほろぼす謀をかんがえていた。

このころ舒明天皇の御子中大兄皇子も、またかねてから蘇我氏のわがまゝなおこないをおにくみになつていたので、鎌足は何とかしてじぶんの心を皇子にうちあけたいと思つていた。

あるとき皇子が蹴鞠の御遊をなされたときはからずも皇子の御靴が脱げた。これをとつて跪ずいてさしあげると、皇子も跪ずいてお受けになつた。

中大兄皇子藤原鎌足ら入鹿を斬る

このことが縁となり、これから皇子にお親みもうして、同じ志の人々といつしよに、謀をめぐらしていた、けれども入鹿は、なかなか用心深くて、家のめぐりに池をほつて城のようにかため、出入りのときには、大ぜいの人々をしたがえ、すこしもゆだんをしなかつた。

たまたま皇極天皇の御代に三韓から貢物を奉ることがあつて、入鹿も大極殿（天皇が政治をおとりになる御殿）へ参列するから、そのおりをさいわいに、これをほろぼすことになつた。皇子は十二の門を閉させ、御自身でほこをおもちになり、鎌足らは弓矢や剣などをもつて、御殿のわきにかくれていた。三韓の表文を讀んでいた、石川麻呂はおそろしくなり聲がふるえたから、入鹿はあやしんで「なぜさようにおそれるのか」と問うた。石川麻呂は「天皇の御座が近いからです」とまぎらした。

もうぐずぐしていられぬので、皇子はたまりかねて、おゝしくもまつさき

にお進になつた。人々もこれにつゞいてとう〳〵入鹿を斬り殺してしまつた。皇子は天皇につゝしんで入鹿の不忠をもうしあげられた。

このとき蝦夷は入鹿が殺されたことをきくと兵をあつめて、皇子と戰おうとした。皇子はさつそく人をやつて、日本には昔から君臣の別（天皇と臣下のくべつがあること）があつてこれをみだすものは、不忠であるわけを、ねんごろにときかせられたので、人々は、ちり〳〵ににげさり蝦夷は家に火をつけて自害し、蘇我氏は全く亡んだ。澤山の記錄や寶物がこの兵火になくなつてしまつた。

うちおさむ入鹿が首に四海波　其角

武内宿禰―蘇我石川……馬子―蝦夷―入鹿

皇極天皇が御位を御弟の第三十六代孝德天皇におゆずりになり、中大兄皇子が皇太子におたちになつた、天皇をおたすけして、これまで勢のあるものが、たくさんの土地をもつて勝手に、人民を使つていた習わしをやめさせられた、これを大化の新政とゆうのである。大化とはそのときにお定めになつた年號である。

これが年號の始めでその元年（第一年目）は紀元一千三百五年、西暦六百四十五年にあたつている。

中大兄皇子が天皇の御位におつきになつた、第三十八代天智天皇ともうしあげる。

この時新羅は唐と結んで百濟、高麗を攻めたので日本から兵をだしてすくわせられたが運わるく、日本軍が戰にまけたので、とう〳〵ひきあげさせられた。これから朝鮮は全く日本からはなれてしまつたのである。

天皇は御心を一筋に國内の政治におむけになり、まづ都を近江にうつされ、鎌足にいゝつけて、いろ〳〵新しい法令を定められた。この法令は第四十二代

文武天皇の大寶の御代になつて、大いに改められ、大寶律令といつてながく政治の本となつたのである。

中臣の鎌足は、さきに蘇我氏をほろぼしてから、二十年餘のながいあいだ、眞心こめて朝廷にお仕えもうしあげ、てがらがおうかつたので、天皇はいつも重くお用いになつていた。鎌足が病んで重くなつたとき、天皇は親しくその邸に行幸なさつていろ〳〵手厚い仰せを賜うたが、ついで藤原とゆう姓をたまい最も高い位をお授けになつた。鎌足は、大和の談山神社にまつられている。

第十一　奈良の都

青丹よし奈良の都はさく花の
　匂うがごとく今盛りなり。

とゆう歌は、奈良の都が非常に盛んであつたことを詠んだものである。

これまで都はたいてい御代ごとにかわる習わしであつたが、第四十三代元明天皇が御位におつきになつて紀元一千三百七十年、西暦七百十年都を奈良へおさだめになつてから、御七代七十年あまりのあいだ奈良の都においでになつたからこのあいだを奈良時代とゆうのである。

第十二　聖武天皇

奈良時代のなかで一ばん盛であつたのは、第四十五代聖武天皇の御代でこれを花に例へるなら、眼のさめるばかり美しく咲きそろつたときとでもゆうことができる。

この時代には、學問が非常にさかんで、歌を詠む人が多く、今でも「萬葉集」とゆうその時代によんだ歌をあつめた書物が殘つている。

このころはたび〳〵唐とゆき〳〵して世の中がたいそうひらけていつた。それ

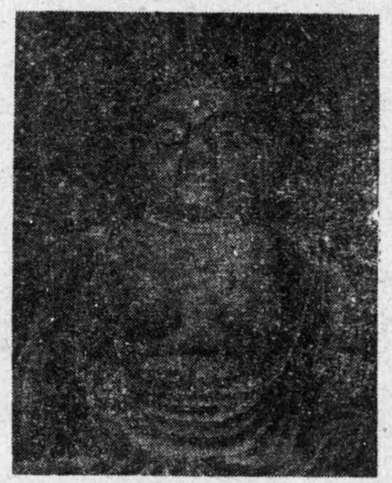
佛教を盛になさつた

で都も唐の風にならつてりつぱになり。宮殿などの建物は、壁を白く、柱をかくぬり、青瓦で屋根をふいて、まるで繪のようなうつくしさであつた。そうして人々の服裝もいちようにはなやかになつた。

天皇は大變佛教をお信じになり、どうかして日本國中にひろめて、よのなかがおだやかによくおさまるようにしたいものと、お考えになつた。そのうちに惡い病氣が流行して、たくさんの人々が死んだ。天皇はことの外ご心配になり佛教の力によつてこの惡い病氣を治そうと決心なさつて、國ごとに國分寺をつくらせられた。とりわけ奈良には大和の國分寺として、東大寺を建てさせ、大佛を鑄てこれをまつらせられた。その大佛殿は後にたび〳〵つくりかえられたが、高さが十五丈餘りもあつて木造の建物では世界第一といわれている。

第十三　奈良の大佛

聖武天皇は唐から渡つてきた大變立派な佛像をみて、これを見本にして、まだ世界中にないような大きな佛像を造ろうとお考えになり、はじめ行基上人とゆうお坊さんにいゝつけて、大きな土の大佛を作らせたが、銅の型に鑄ないうちに中止せられた。



奈良の大佛

第二回目に又土の大佛を作りいよ〳〵銅の鑄造にとりかゝられたが、思うようにできないので、八遍も鑄直し三年目にやつと出來上つた。高さ五丈三尺もある大きなもので今から約千二百年ばかり前のことである。

その後大佛はからだに金を塗つたり、何度も火事にやけたりして、今の大佛はその度に手を加えたものである。

奈良七重七堂伽藍八重櫻。　芭蕉

菊の香や奈良にわ古き佛たち。　同

第十四　光明皇后

光明皇后は聖武天皇の皇后で藤原鎌足の孫でいらつしやつた。大變美しいお方で其のお顔が玉のように光つていたから「光明」とゆう名をおつけになつたとゆわれている。

この皇后も大變佛教をお信じになつた。そして顔が美しいように、心もたいへんやさしいおかたで、病人や貧しい人々のために、病院をたてゝ、藥をおめぐみになり、また親のない子供をあつめて、これを養わせられ、ひろく人民をおいたわりになつた。

行基と道鏡

清麻呂が宇佐にいつた

第十五　和氣清麻呂

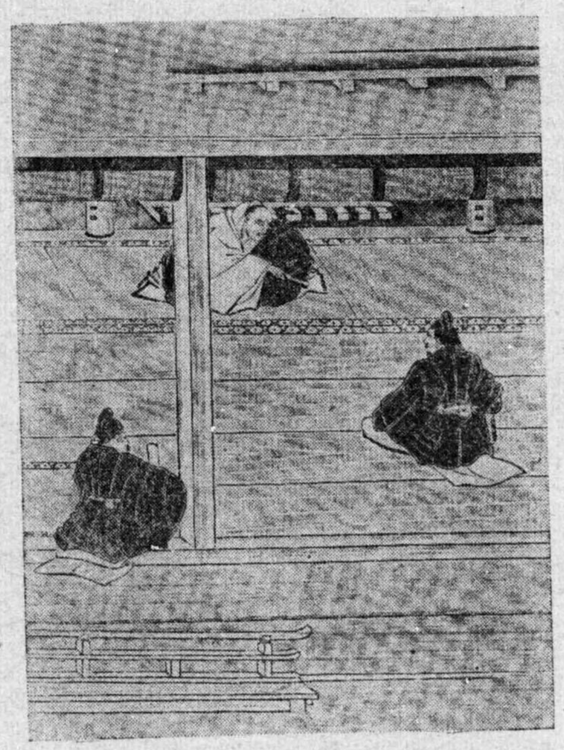
この頃は佛教が盛であつたから、えらい僧もたくさんでゝきた。なかでも行基は寺を建て、道をひらき、橋をかけ、池をほり、舟つきをさだめなどして、大いに世の利益をおこしたので人々からたいへんうやまわれた。けれども、道鏡の如きは、第四十八代稱德天皇の御信任がふかく、位も大政大臣にすゝみ、いろ〳〵政治にあずかり我儘勝手なことをするようになつた。

そのころ九州の宇佐八幡の神主が道鏡にへつらつて出世をしようと思い。宇佐八幡のお告であるといつわつて、「道鏡を天皇の位につかせると日本國中はおだやかにおさまりましよう」とわざ〳〵九州からさて天皇にもうしあげた。道鏡はこれをきいてたいへんよろこんだ。普通のものなら一言のもとにはねつけてしまうのであるが、それを喜ぶ道鏡こそ實に無道の極みである。

天皇はもう一度神のおしえをうけてくるようにと、かねてから忠義の心の厚い和氣清麻呂を宇佐におやりになつた。

清麻呂はそのとき低い位にいたので、道鏡は清麻呂が宇佐にゆこうとしたとき自分のところによんで、「歸つたら大政大臣の位につけるから自分のよいようにはからつてもらいたい」といつて利をもつて味方にさそいいれようとした。

けれども清麻呂は、忠義の志の深いりつぱな



和氣清麻呂が神の敎をもうしあげた

人であつたから、けつして自分の出世のためにその志をかえるようなことはなかつた。

宇佐八幡につくと身を清めて六日間お宮にこもり一心に神様にお伺いをたてた。

宇佐からかえつてくると、すぐ天皇の御前にすゝみて「日本は國の初から君と臣との別は明らかにさだまつている。どんなことがあつても、臣であるものを君とすることはない、無道のものはやく除け。」と神の敎えをすこしもおそれるところなく、そのまゝ正直にもうしあげた。

稱德天皇は、そのときにつこりとお笑いになつたけれども道鏡は清麻呂の一言でみごとに失敗してしまつたので、大いに怒つて清麻呂の名を穢麻呂とあらため大隅に流し、しかもその途中で殺させようとした。たま〳〵雷雨があつたため、清麻呂は、あやういところを、やつとまぬかれた。

清麻呂の一言で幸い萬世一系の日本の國體が汚されることをまぬかれたのは、實に有難いことである。

それからまもなく第四十九代光仁天皇の御代になつて、道鏡は下野においやられたが、清麻呂はよびかえされた、長い間、苦しめられていた清麻呂もやつと花の咲くときがきだ。

そののち清麻呂は第五十代桓武天皇の御代まで朝廷につかえて、ます〳〵忠義をつくし、從二位とゆう重い役にもちいられた。今は京都の護王神社にまつられている。

第十六　和氣廣虫

和氣廣虫は清麻呂の姉で、弟とともに眞心こめて朝廷にお仕えしていたので、清麻呂がながされたとき、廣虫もまた備後にながされたが、清麻呂といつ

しよによびかえされて、ふたたび朝廷に仕えるようになつた。

廣虫はつゝしみふかい人で、一度も他人のかげぐちをいつたことがなく、まだなさけぶかくて、たくさんの棄兒をひろいあつめて、そだてあげたが、その數は八十人あまりにも、およんだとゆうことである。いまは、廣虫も護王神社にあわせまつられている。

第十七　平安京

見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春のにしきなりけり。

これは平安京の春の眺めを詠んだのである。七代七十年の奈良の都も第五十代桓武天皇の御代となり紀元一千四百五十四年西暦七百九十四年、今の京都の地へ都をおうつしになつた。四方からあつまつてきた人民は、みなよろこんで、このあたらしい都を、平安京といつた、これから明治のはじめまで七十三代、

千七十年のあいだ、御代々の天皇はたいていこの都にいらつしやつた。

その中でも桓武天皇の御時から源頼朝が鎌倉に幕府を開くまで凡そ四百年の間を平安時代または平安朝とよんでいる。

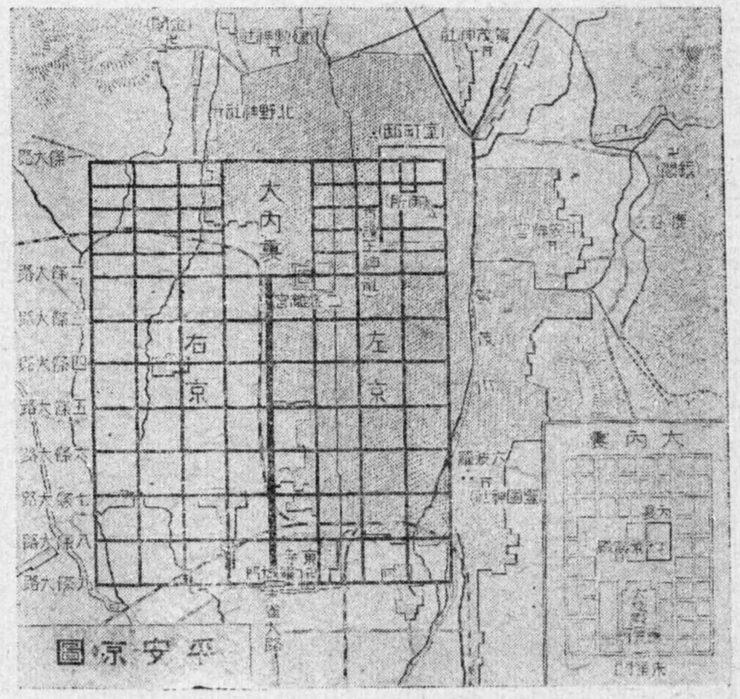
第十八　桓武天皇

桓武天皇

光仁天皇の後で、天皇の御位におつきになつた第五十代桓武天皇はお生れつき大變かしこいお方でした。奈良の都は四方山にかこまれているので、なにかにつけて不便なことが多い。そこで都をどこかえうつして、世の中をますゝすゝめてゆきたいとおかんがえになられた。ある日、和氣清麻呂が山背國宇多村（今の京都）は大變景色の美しい所で、三方は山にかこまれ、南の平野には、きれいな川が流れていて都をたてるには申分のない土地ですと申しあげた。

天皇は早速清麻呂の案内でその土地においでになられ

都を京都へおうつしになつた



た。清麻呂のいつたようによい土地であつたので、そこへ都をおうつしになることになつた。

奈良の都よりはずつと大きなかまえで、都の中央には南北につうずる大道があつて、左京、右京にわかれ、そのうえ、碁盤の目のようにいくすじもの道路が縦横に開かれて、じつによくとゝなつていた。

大道の北のはしには、大内裏があつて、そのなかに内裏や大極殿や諸官省があつた。内裏は天皇のいらつしやるところで、紫宸殿をはじめたくさんの御殿がある。

大極殿は大事な御儀式を行わせられるところで、いま桓武天皇をおまつりしてある京都の平安神宮は、この御殿のかたちを、うつしてつくつたものであるから、これによつて昔のありさまをだいたい知ることができる。

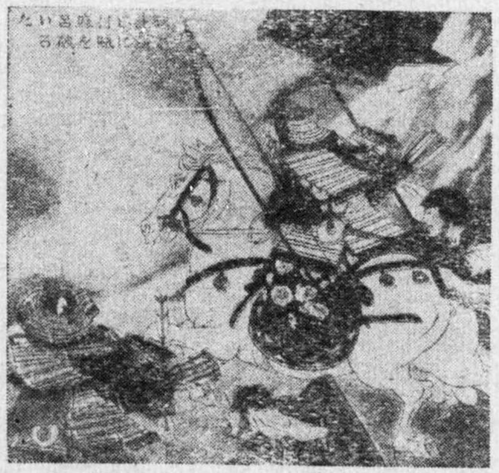
第十九　坂上田村麻呂

桓武天皇の御代に蝦夷がそむいて人民をくるしめたので、天皇は坂上田村麻呂を征夷大將軍として、これをお討たせになつた。

田村麻呂は大變強い大將で、身の丈が五尺八寸、目方が三十二貫、それに目は鷹のように鋭く、髭は針金のようにぴん〳〵していたとゆうことで、一度田村麻呂に睨まれると、どんな惡者でも縮みあがる程であつた。しかしまた、なさけふかくやさしい人で、わらうときは幼兒でも親のようになついて、はいよつたとゆうことである。

田村麻呂は兵をひきいて出征し、いたるところで、てがらをたて、とう〳〵陸中にまでもすゝんで、賊をうちたいらげ、降參したものには、親初にいつてきかせて、二度とそむかないようにし、もうこれなら大丈夫だとゆう見通しが

つくと、軍隊をまとめて都にかえつた。都の人達はこの凱旋（軍にかつて歸る）將軍をよろこんで迎えた。



坂上田村麻呂たいろことろにろぶやを賊る

田村麻呂はそのてがらによつて、朝廷からあつくおほめにあづかつた。そうしてしだいに位が高かくなつて第五十二代嵯峨天皇の御代に年五十四さいでなくなつた。

天皇は、これをたいそう惜しまれ、とくに山科に墓地をたまわり、屍を平安京の方にむけ、武器をそえて、おてあつく葬らせられた。これからのち將軍となつて出征する人々は、みなこの墓に參詣して戰勝を祈つたとゆうことである。

第二十　傳教大師

傳教大師は近江の人で、名を最澄といつた。十二の時、奈良に出て勉強したが、其のころの奈良はだらけた生活をするものが、多かつたので、一人山の中へ入つてしんみり勉強しようと思つて、比叡山の山奥に引込んで一生懸命に勉強した。そこに建てた小さな寺が延暦寺の起りである。

そのうちに、最澄の評判が都へつたわつたので、桓武天皇はわざ〳〵都へお呼びよせになり、「唐へいつてもつと勉強してきてはどうか。」と、ありがたいお言葉を賜り、最澄は非常に喜んで、今の大阪から出發した。

途中で暴風雨にあつたが、ついに唐の明州とゆうところについて、佛教を學びたくさんの經文を、もちかえつて朝廷にさしあげた。それから再び比叡山の延暦寺に引き籠つて、日本の國へ新らしく天台宗の教をひろめた。また諸國を

まわつて、人里はなれた山中に旅屋をたてゝ、旅人の便利をはかりおうぜいの弟子をやしなつて、宗旨を研究させたので、學問のふかい僧が、おうく世にでるようになつた。

後に第五十六代の清和天皇から、傳教大師とゆうおくり名をたまわつた。

第二十一　弘法大師

弘法大師は、讃岐國に生れ、五、六さいのころから土で佛様をつくつて喜こんでいた。

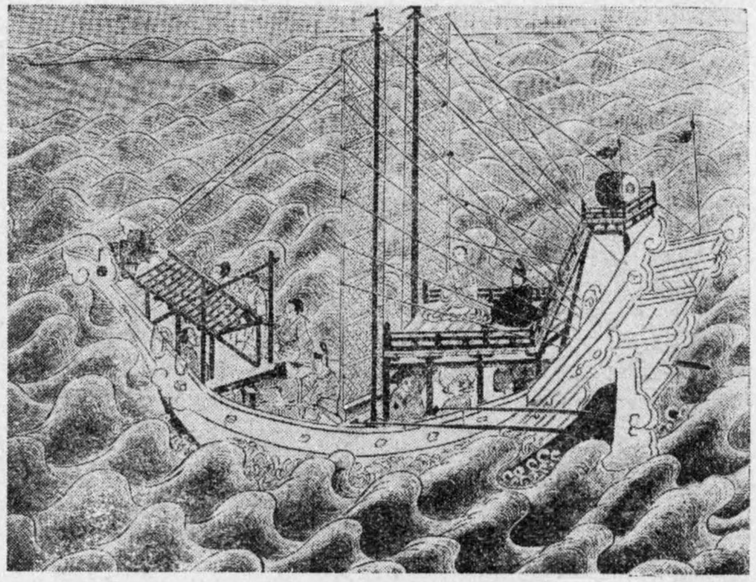
この子はきつとお坊様にすれば出世するであろうと、皆からいわれていた。十五の年に平安京にでゝ勤操法師とゆう人の弟子になつて名も空海と改めた。

桓武天皇の御信任を得て、最澄と一緒に唐に渡つて勉強することになつた。途中暴風にあつて福州とゆうところにつき、それから唐の都に行つて慧果とゆう眞言宗第一のお坊様について學んだ、空海は二十年位は唐にいるつもりであつたが、慧果が死ぬとき、どうか日本へ眞言宗を傳えてくれと頼まれたので三年いて歸つた。そして新しい眞言宗を傳えた。

それから嵯峨天皇のあつい御信任をいただいて、はじめて紀伊の高野山を開いた。

諸國をめぐつてさかんに宗旨をひろめ、世の中のためになること

眞言宗をひろめた



空海が唐に渡つた

をした。

ことに四國八十八ケ所の札所を開き、讃岐に萬農池の堤を築いて、いまにいたるまで、多くの人々に利益をあたえている。また京都に學校をたてゝ、身分の貴いとか賤しいとかの區別なく、ひろく人々の入學をゆるして、いろ〳〵の學問を授けた。なお空海は詩文にすぐれ、とりわけ文字が上手であつた。かのいろは歌も空海がつくつたものであろうとつたえている。

空海は後に朝廷から弘法大師のおくり名をたまわつた。

いろは歌

色は匂へど散りぬるを、わが世誰ぞ常ならむ。有爲の奥山今日越えて淺き夢見し醉もせず。

片假名は吉備眞備がつくつたとつたえている。

道眞がおもくもちいられた

第二十二　菅原道眞

菅原道眞は、野見宿禰の子孫である。代々學者の家であつたが、道眞は幼いときから學問にはげみ、十一歳のとき、晴れた春の宵の詩を作つて人々をおどろかしたくらいで、やがて名高い學者となり、朝廷につかえるようになると、天皇の御信任がふかゝつた。

第五十九代宇多天皇は、藤原氏一門のいきおいがあまりにつよく、政治をおもうまゝにするようになつたので、どうかしてこれを、おさえようとおかんがえになり、道眞をおもくもちいて、そのいきおいを、わかとうとなさつた。

宇多天皇は間もなく位を第六十代醍醐天皇におゆずりになつた。天皇はいたつておなさけふかく、あるさむい夜、御衣をおぬぎになつて、まづしい民のつらさをしたしく、お思いやりくださつたほどの御方であつた。

筑前にうつされた

脱ぎ給う御衣は天下の衾かな

天皇は、道眞を右大臣にひきあげて、左大臣の藤原時平とならんで政治をおこなわしめられた。

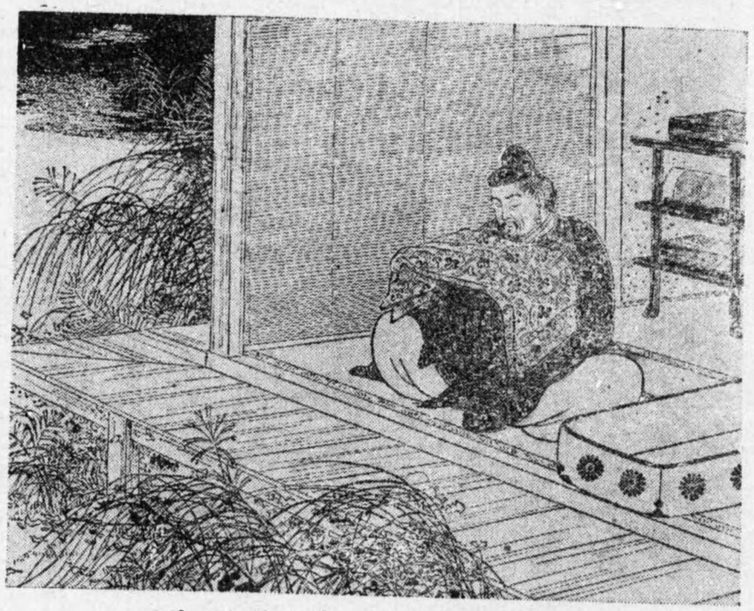
時平はその時まだ年もわかく、學問もとうてい道眞にはおよばなんだ。しかし藤原氏以外のものがそんな風に重くもちいられるのを非常に不平に思つて、道眞を陷入れようとして、「天皇の御弟齊世親王を天皇の御位におたてしようと、たくらんでいます。」と天皇へ蔭口をきいた。たび〳〵そんなことをもうしあげたので、とう〳〵道眞は筑前の太宰府にうつされた。

道眞は、家をでるとき、日頃愛していた庭の梅にまで名殘をおしんで、

東風吹かばにおいおこせよ、梅の花
あるじなしとて春を忘るな。

とゆう歌をよんだ。それから都をでて、明石の驛にとまつたとき、

天皇のご恩をわすれなかつた



菅原道眞が御衣をさゝげて詩をつくる

驛長無レ驚時變改、
一榮一落是春秋。

といふ詩を宿の主人にあたえた。

筑前についてのちは、門をかたく閉ざして、一室にきんしんし、かたときも、天皇の御事をおわすれもうすことはなかつた。

春がさつて夏もすぎ、はや九月十日となつた。ちようど去年の今日今夜こそ宮中の御宴の席にはべり、詩をさしあげて天皇の御心にかない御衣をいただいた日である

ことを、おもいだしては、今更のように君恩のかたじけなさにかんじいり、恩賜の御衣（天皇からいたゞいたおめしもの）をさゝげて、涙ながらにあつく、おれいをもうしあげ詩をつくつてそのまごゝろをのべたのであつた。

去年今夜侍二清涼一　秋思詩篇獨斷レ腸
恩賜御衣今在レ此　捧持毎日二拜餘香一

こうして道眞は、太宰府でつゝしんでいること三年におよんだが、とう〳〵病氣にかゝつて、そこでなくなつた。年五十九歳であつた、その後都にはたび〳〵火事がおこり。雷が落ち、時平はなくなり。その子もつぎ〳〵になくなつたから、時の人はこれを、道眞公のたゝりだといつてさわいだ。

後になつて道眞に罪のないことがあきらかになり、朝廷からは、たかい官位をおくられた。

また世の人々は、天滿天神とあがめうやまつた。そうして京都の北野神社や、筑前の太宰府神社をはじめ、全國いたるところにまつられている。

藤原鎌足―不比等……冬嗣―良房―基經―時平
―忠平

第二十三　藤原道長

道長が榮華をきわめた

このよをばわがよとぞ思う、もち月の
かけたることもなしとおもえば。

これは藤原道長が、じぶんの望がみなかつたのを、十五夜の滿月にくらべて、一門の榮華を、ほこつた歌である。

道眞がしりぞけられてから、藤原氏の勢がます〳〵盛になり、かつてに政治をおこない、なにでも思いどうりにならないものはなかつたから、たゞ夜となく晝となく、遊び樂しんでくらしていた。道長のときになつて、もつとも榮華

をきわめた。三人の天皇に三十年も長い間おつかえして、女は三人まで皇后となり、皇子は三人までひきつゞいて御位におつきになつた。

そして道長の富は、皇室にもまさり、たいそうおごつた生活をした。

京都に法成寺をたてたが、これは奈良の東大寺にもおとらぬ、大きな寺であつた。

工事がまだできあがらないうちに、道長が病にかゝつたので、その子の頼通は命令をだして、「朝廷のことはあとまわしにしても、法成寺の御用はけつしておこたらないように。」といゝつけた。

このように道長父子は、つねに朝廷をおそれないで、わがまゝなふるまいが多かつた。

藤原忠平―師輔―兼家―道長―頼通……忠實―忠通
　　└教通　　└頼長

第二十四　平安時代の文化

小野小町

藤原氏が勢を專らにして、榮華をきわめた時代には、それにつれて學問技藝が大いに進んだ。

いろ見えでうつろうものは世の中の
　人の心の花にぞありける。
（花のようにいろはないが、花のようにかわりやすいものは人の心である）

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて
　何かは露を玉とあざむく。
（蓮はどろのなかにさいても、まことに清かで、すこしもよごれていない

が、葉の上の露を玉とみせるのは、人を欺くもので、不正直である）

紀貫之

人はいさ心もしらずふるさとは
花ぞむかしの香ににおいける。

（花は昔のとうりにさいているが、人の心はどうであらうか、あてにはならぬ）

伊勢大輔

古の奈良の都の八重櫻
きょう九重に匂いぬるかな。

（九重とは宮中のことで、八重が九重に匂うといつたところが、たくみである）

小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければ
まだふみも見ず天の橋立。

小式部内侍は若いのに、あまり歌が上手であつたから、きつと母に作つてもらつているのだと、ゆううわさがあつた。あるとき母が丹波の方へいつた留守中に宮中に歌合があつて、内侍もそれにいつた。中納言定頼が、内侍に向つて、「お母さんがいないが歌がつくれますか」とひやかしていつた　内侍は心のなかで、腹をたてたが、顔には色にもださずに、大江山や生野は遠いから、母から文もこないし、自分も橋立をふんだことはありませんと、すぐ歌で答えたので、定頼も他の人も、小式部の歌の上手なのにかんじて、母に代作してもらつているとゆう、うたがいもはれた。

清少納言

枕草紙をかいた清少納言がある冬の雪のふり積つた日、宮中に参つたとき

皇后は大ぜいの女官たちに、

「香爐峰の雪は如何に。」とおうせられた。

少納言はすぐに立つて御前の御簾をまきあげた。これは唐の白樂天の詩に、

遺愛寺鐘欹枕聽　香爐峰雪撥簾看

とあるのを、皇后が知つておられたので、清少納言が御心をおさつししたのである。

紫式部

紫式部は、才ばしつた清少納言とは反對に誠におとなしく、しとやかで、學問は深かつたけれどもすこしも、たかぶらなかつた。幼ないときから人の書を讀むのを聞いて、皆覺えた。兄が史記をよんで時々忘れるところがあると、側から教えた程であつた。父はいつも「お前が男でないのが殘念だ」といつたとゆうことである。

式部のあらわした、源氏物語五十四帖は、源氏の君を中心として宮中のありさまをえがきだした小説で、文章、組立古今一といわれるほど立派なものである。

百濟河成と飛驒工匠

あるとき工匠が河成に「今度私の家に一間四方の堂をたてたから、來て繪をかいてくれないか、」といつた。いつてみると、四面の戸が皆あいていた。縁へ上つて南の戸から入ろうとすると、その戸はとじてしまつた。驚いて西へ廻ると、その戸も閉じて南の戸があいた。北へ廻るとまた北の戸がしまつて、西の戸があいた。東へ廻つても駄目なので、腹をたてゝかえつてしまつた。

數日たつて河成から工匠の許へ「お目にかけたいものがあるからでかけてくれ」といつてきた。

敵討をするかも知れないと思つたが、再三よびにくるので、いつてみた。上

へあがつて一間へいると腐れかゝつた死骸がある。思いがけないものをみたので、驚ろき叫んで引きかえすと、河成がきて笑いながら「なおよく見たまへ。」とゆうので、おそる〳〵近よつて見ると繪であつたとゆうわざくらべの話もこの時代のことである。

巨勢金岡

巨勢金岡は宇多天皇のときの繪の大家である。あるとき仁和寺の壁にえがいた馬が夜々出てきて、田の稻をあらしたと、いわれる程上手であつた。のちに巨勢派とゆう一派をなした。

第二十五　前九年の役

八幡太郎義家が、逃げる貞任を追いかけて、「衣のたてはほころびにけり。」と下の句を詠みあげると、貞任も馬をとめて、

「年を經し絲のみだれの苦しさに。」と上の句をつけた、その優しい心に感じて、義家は構えた矢を外して歸つたとゆう、名高い武士の情は前九年の役に起つた話である。

さきに藤原氏が京都でさかえている間は、その一門のみが高い官職についたから、どんなに才能がすぐれているものも、京都では出世ができなかつたので、たいてい地方の役人となつて諸國にくだり。藤原氏が地方の政治を、かえりみないあいだに、そのまゝそこにとゞまつて武士となるものが多かつた。これが武士の起りである。

源氏は第五十六代清和天皇からでて、はやくからいきおいがつよく、代々てがらをたてゝ、武名をあげたが、義家のときになつて、いつそう其の名があらわれた。

源義家は、頼義の長男で八幡太郎ととなえた。

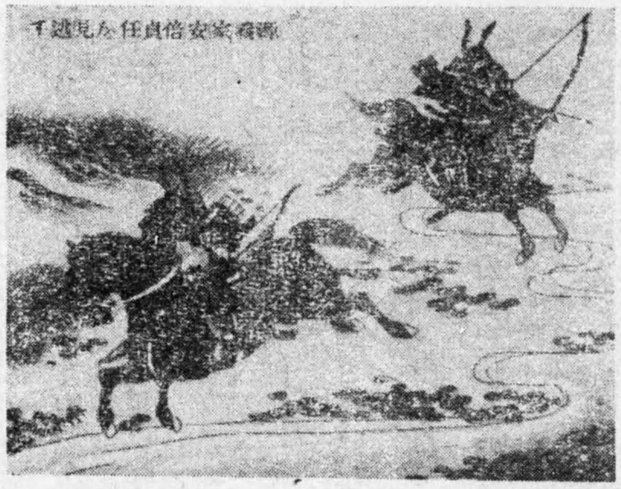
頼義が義家とともに安倍氏を討つた

第七十代後冷泉天皇の御代に、陸奥の安倍頼時が、その地方をしたがえてそむいたので、朝廷は、源頼義を陸奥守に任じて、これを討たせられた。頼義は、義家とともに頼時をせめて、とう〳〵これをたいらげた。

けれども頼時の子貞任、宗任はなおいきおいがつよくて、なか〳〵降参しなかつた。そこで、頼義はすゝんで、これとたゝかつたが、おりからのさむさに、大吹雪で、道は悪く、兵糧はすくなく、人も馬もつかれはてゝ、さん〴〵にうちやぶられた、このとき義家は、年僅に十七であつたが、すぐれた勇士で、とりわけ弓が上手であつたから、すぐ馬をとばして、たちどころに、おうぜいの敵を射殺した。しかも味方は頼義父子をはじめ、わずかに七騎となつたが、切りまくり、きりまくつて、やつと敵のかこみをのがれることができた。

その時頼義は、出羽の人、清原武則に助をたのんで、これに力をえて進軍し、いたるところで賊をやぶつて、衣川の館に攻め寄せたので、さすがの貞任も、

頼義が安倍氏をほろぼした



源義家安部貞任をみのがす

館をすて、逃げだした。歌をよんだのはこのときである。

それからすゝんで、貞任らを厨河の城にかこんだが、賊は城のなかに、高いやぐらをかまえて、そのうえから官軍をねらいうちにした。官軍はそのために、大層苦しんだ、そのとき頼義は兵士にいゝつけて、人家をこわし、堀をうめさせ、また草を山のようにつみ、じぶんは馬からおりて、はるかに皇居をおがみ、こゝろをこめて石清水八幡宮においのりして、火をなげつけ

ると、折から大風が吹いて、城に火がついたから、すかさず攻めこみ、とうとう貞任をきりころし、宗任らを生捕にして、この亂をすつかりしずめた。この戰を前九年の役とゆうのである。

緋縅も柿色になる前九年　（川柳）

第二十六　後三年の役

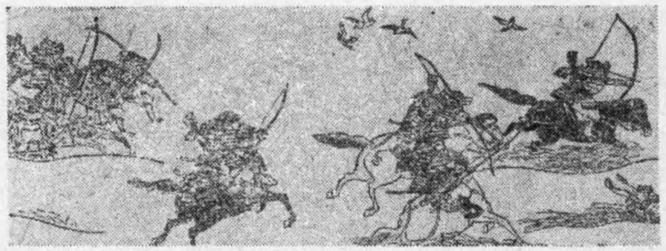
吹く風を勿來の關と思いしに
路もせに散る山櫻かな。

（風の吹くのを止めるかと思うと、そうではない、山櫻がちら〳〵ちつている）

ふたゝび奥羽地方が、亂れて、源義家が、陸奥守となつて、勿來關まできたとき、折しも彌生（三月）の花曇り、吹く春風にそよ〳〵と、櫻が鎧の袖にちりかゝるのを見て、手綱をひかえて詠んだ歌である。

奥羽地方は、さきに清原武則が頼義にみかたして、安倍氏の亂をたいらげてからは、その一族が安倍氏にかわつて、いきおいをえたのであつたが、白河天皇の御代になると、其の子孫のあいだに爭がおこつて、奥羽地方がふたゝびみだれた。

武則の子の武衡らは、金澤柵にたてこもつて義家にてむかつた。あるとき義家はこれを攻めようと進軍すると、一列の雁が列をみだして飛びたつのをみて、「必ず伏兵があるにちがいない」といつて探らせると、草むらの中に伏兵のあるのを、見いだしてこれをみなごろしにした。

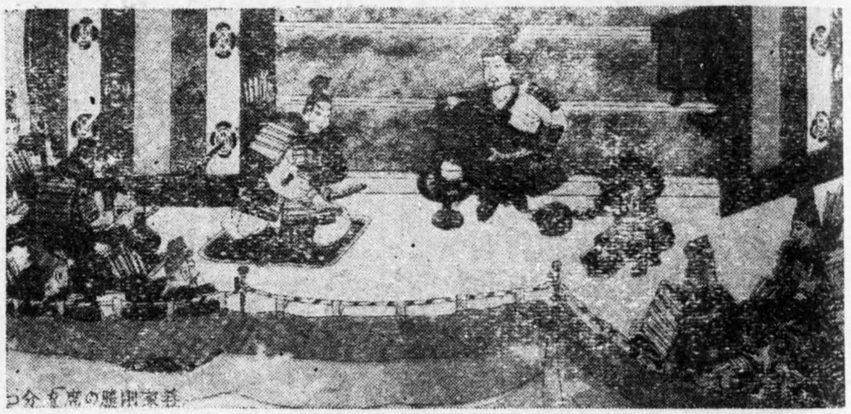


義家雁の列のみだれるのをみるのをしつたあるのが伏見の

源義家が弟義光と陣中であつた

これは先年義家が、前九年の役の戰物語をしていたとき、大江匡房が別室できいて、「義家は大將になる才はあるが、惜しいことに兵法を知らない。」といつたので、匡房について、兵法を學んだため、それが役に立つたのである。

このころ弟の義光は



義家剛愎の座を分つ

兄義家の身の上を心配して、官をやめて、はる〳〵京都からくだつてきた。義光は笙を豐原時元に學んで、その奥義をきわめた。陸奥へゆくとき、時元の子時秋は足柄山までついていつて、そこで義光から笙の奥義を授かつたとゆうことである。

義家は、弟のまごころに感激の涙をながしながら、「よくきてくれた。おまえをみるとまるで亡き父上にあつたようなきがする。」といつてたいへんよろこんだ。

二人は力を合せて攻め戰たが、なか〳〵勝負がつかなんだ。

鎌倉權五郎景政

そこで義家は兵士の心をはげまそうとかんがえ、毎日兵士の戰ぶりをみて、夕食のとき剛臆の座をわけて、勇しい働をしたものは剛の座に坐らせ、臆病であつたものは臆の座に坐らせたので、皆剛の座に坐らうとして、勇しく働いた。

鎌倉權五郎景政が、わずかに十六歳であつたが、はなばなしく戰い、敵に右の眼を射られたが、屈せず戰いつゞけた。その後、陣にかえつて、「矢を拔いてくれ。」といつて仰向けにねた。三浦平太郎爲次とゆうものが、足で景政の顏をふみながら矢を拔こうとすると、景正は、刀をぬいて爲次を突こうとするので、爲次は驚ろいて「何をするのだ。」とゆうと、景政は「生きながら、足で顏をふまれるのは、武士の恥だから、汝を殺そうとするのだ。」といつたので、爲次は膝をかゞめ顏をおさえて矢を拔いた。多くの人はこれを見て、感心し、これより景政の名はます〳〵高くなつた。

こうして年月がたつにつれて、武衡らは兵糧が不足して、そのいきおいもだん〳〵おとろえたので、とう〳〵城をやいてにげだした。

義家はこれをおつかけてほろぼしてしまつた。世にこれを後三年の役といつている。

戰がすんでから、義家は戰功のあつたものに恩賞をあたえられたいと、朝廷におねがいしたが、おゆるしがなかつたので、自分の財産をわけて、部下の將士にあたえた。それからは、義家はます〳〵武士の間におもんぜられて、源氏のいきおいは、とりわけ、東國のちほうでさかんになつた。

後の武士は義家を八幡殿と尊んで、弓矢の神とあがめた。

清和天皇―貞純親王―源經基―滿仲―賴信―賴義―義家―義親―義光
　　―爲義―義朝―義平
　　―爲朝

保元の亂

賴長上皇におすゝめして兵をあげた

爲朝の武男

第二十七　保元の亂

弓の上手な鎭西八郎爲朝が、奮戰した保元の亂とゆうのは、藤原氏の一門に權力のあらそいがあつて、右太臣藤原賴長は、兄の關白忠通にかわろうとのぞんで、兄弟仲がよくなかつた。

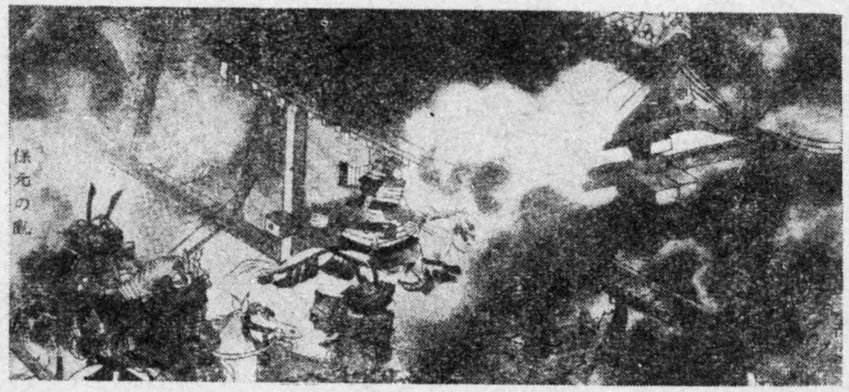
第七十七代後白河天皇の保元元年に、賴長は、天皇の御兄崇德上皇の御子重仁親王を御位におむかえして、自分が關白となろうとかんがえ、上皇におすゝめして兵をあげようとし、義家の孫源爲義をみかたによびよせた。すると爲義はその子爲朝らをひきいて、上皇の御所にまいつた。

爲朝の長子義朝は、平清盛らとともに、天皇のおよびだしをうけ、皇居にまいつておみかたもうしあげた。

爲朝は、爲義の八男で、體格はひとなみすぐれておうきく、身のたけ七尺ばかりもあり、しかも力がつよくて、弓がたいへん上手であつた。十三歲のとき九州にくだつて、みずから鎭西八郎ととなえ、大勢の部下をひきいて、わずか三年の間に、九州をうちしたがえようとしたほどの剛のものであつた。父に從つて上皇の御所にまいつたときは、十八歲であつた。

賴長は爲朝をよんで、軍のはかりごとをたずねた。爲朝は即座に、「私は長い間九州にいて、二十度あまりも合戰をしましたが、勝戰はいつも夜討にかぎつていました。それゆえ今夜すぐ、皇居におしよせ、三ぽうから火をつけて、一方からせめたてたなら、きつとかつにちがいありません。勇氣のある敵は、兄義朝だけですが、それとて、私の矢一筋でたおせます。まして清盛らのへろへろ矢ぐらい何でもありません。」ときつぱりこたえて夜討をすゝめたが、賴長はこれをもちいようとはせなかつた。

爲朝は、「合戰のことは武士でなけらねば、わからない、義朝はかならず今夜



保元の亂

せめてくるにちがいない、口惜いことだ。」といつたが、はたしてそうであつた。

義朝、清盛が夜に乘じてせめよせてきた、合戰がはじまつて清盛の兵が五十騎ばかり爲朝におしよせてきた。「こゝを守つてゐるのは誰人ぞかく申すは清盛の郎等伊藤武者景綱」と名乘と、爲朝はこれをきいて、「汝の主清盛でさえ不足に思うに景綱なら引退け」といつたので、景綱は大いに怒つて「下蔔の射る矢が立つか立たぬかご覽ぜよ」と引しぼつていたが、爲朝は事ともせず。「汝の詞のやさしさに矢一つ與えるぞ。うけて見よ」とひようと射たので、先の一人を射

通して餘る矢は次のものにあたつた、つゞいて山田小三郎伊行は爲朝のために馬から倒に射落された。平氏の一軍は恐れて逃げだした。義朝は二百騎を率いてやつて來て、大聲あげて「清和天皇九代の後胤源義朝が天皇の仰をうけ馳向うのである一家の者なら早く退散せよ」とよびかけると、爲朝は、「父判官が上皇の仰せをうけたるその代官として、鎮西八郎爲朝が一陣を承わつて守つて居りますぞ。」と答える。義朝はかさねて、「さては弟よ、兄に向つて弓引とは天罰を恐れぬか。」とゆうと、爲朝は又「もつともながら父に向つて弓をひきなさるのはいかゞ。」といゝかえすと、義朝も道理につまつて返事がなかつた。

そのうちに義朝らは火を風上にはなつたので、味方の軍は、たちまち苦戰におちいり、賴長は矢にあたつてたおれた。爲朝らは勇をふるつて、せいいつぱいふせぎたゝかつたが、とう〳〵やぶれて、おそれおうくも上皇は讃岐におうつされになり、爲朝は伊豆の大島にながされた。世にこれを、保元の亂とゆう

のである。

第二十八　平治の亂

平重盛は一族のものを集めて

「年號は平治で、土地は平安、そのうえわれらは平氏である。この敵はきつと平ぐにちがいない。」とはげまして攻めよせた。

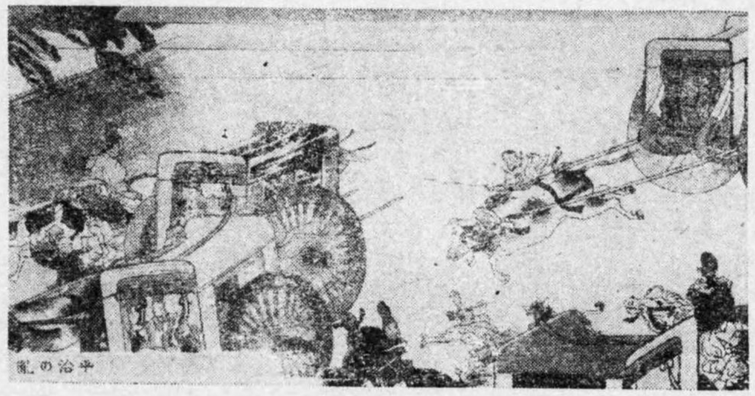
保元の亂がしずまつて、清盛や、義朝は、それ〴〵そのてがらを賞せられたが、なかでも清盛は、そのころ勢力のあつた、藤原通憲としたしくして、ます〳〵いきおいをましたので、義朝はこゝろひそかに不平におもつていた。

第七十八代二條天皇の御代、藤原信頼が、後白川上皇にお願いして、高い役をえようとしたが、通憲にさまたげられたので、ふかく通憲をうらみ、ひそかに義朝といつしよになつて、これをころそうとたくらんだ。

平治元年、清盛は、子重盛らと、熊野の神社に參詣するため、京都をたつた。そこで義朝、信頼はにわかに兵をあげて通憲をうとうとした。通憲は、はやくも身のあやういのをさとつて、京都をにげだしたが、とちゆうできられた。このあいだに義朝らはおそれおうくも、上皇の御所をやき、上皇と天皇を皇居におしこめもうした。

清盛は途中でこれをきいて、「どうしようか」とまよつていたが、重盛は「君が惡い臣にとりかこまれてあそばすのに、どうして武臣としてお救いもうさずにおけましようか」とすゝめられて、いそいで京都にひきかえして、ひそかに天皇をじぶんの邸におむかえもうしあげた。上皇もまた皇居をおにげだしになつた。

天皇は清盛におうせつけて、義朝をおうたせになつた。義朝らは皇居にたてこもり、白旗を幾筋も〳〵うちたてゝ、いきおい盛に、清盛の軍をまちうけた、



平治の亂

清盛はすぐ重盛らをやつてこれをせめさせたが、平家の赤旗は、おりからのあさかぜにひらめいて、じつにいさましい進軍であつた。

このとき重盛が、この敵はきつと平ぐとはげました、信頼の臆病ものは我先にと逃げた、重盛が五百騎を率いて大庭の椋の木の下まで攻めつけた。義朝は惡源太義平に「あれを追出せ」といゝつけた。

義平は大聲に名のりをあげ、十七騎をひきい、五百騎のまんなかへわつていり、西より東へ追いまくり、北より南へ追い廻し、縱横十文字に蹴散らして、「葉武者には眼をかける

な。大將を討ちとれ。」と下知して、重盛目がけて、大庭の椋の木をなかにたて、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻した。平家の五百騎はそのいきおいにおそれて、さつと引退いた。再び押しよせると、惡源太は弓を小脇にかい挾み、鐙ふんばり、突立ちあがり、「幸いに義平は、源氏の嫡々、御邊も平家の嫡々。よき敵ぞ。寄れや組もう」といつて先の如く椋の下を五六度まで追いまわした。義朝は平氏の軍がにげかけたのをみて、たゞちに兵をひきいておつかけたが、かえつてやぶれて、引あげようとしたときには、皇居ははや平氏の軍に占領せられていた。義朝は、そこで、東國にはしろうとしたが、途中、尾張の國で家來にころされた。また信頼や義平らもとらわれてきられた。この時源氏の一門で生命を助けられたものは後に平氏を討つた義朝の二番目の子供の頼朝と、それから常盤御前の抱いていた今若、乙若、牛若の三人の小さい子供だけであつた。頼朝は伊豆の蛭島に流され

た。世にこれを平治の亂とゆうのである。

桓武天皇―葛原親王―高見王―平高望―┬―國香―貞盛
　　└―良將―將門

……忠盛―┬清盛―重盛―維盛
　　└經盛―宗盛

第二十九　平氏の繁榮

平氏が全盛をきわめた

「平氏でないものは人でない」とまでうらやまれるやうになつた平氏は、保元、平治の二度の亂で、源氏の勢がおとろえたのでひとり舞臺とゆうことになつた。

清盛の八人の娘の中二人まで、皇后になり、清盛自身は、急に從一位太政大臣にすゝみ。その子重盛は、内大臣左大將、次男宗盛は中納言右大將、三番目の知盛は三位の中將といつたように、當時、平氏の一門の六十幾人は袖をつらねて立身出世した。一族一門がこんなにまで榮えたことは、これまでに一度も例のないことである。

その上、日本國中六十六ヶ國の中、平氏の領分は三十國あまりにもわたつて藤原氏にもまさる程繁榮した。

第三十　清盛の我儘と重盛の諫め

清盛のわがまゝ

清盛は勢が盛になつたのにまかせて、だん〳〵わがまゝなふるまいがおうくなつたので、「驕る平氏は久しからず」と清盛を憎むものがだん〳〵ましてきた。

後白河上皇もこれをおさえようとおかんがえになつたが、御心のようにならなかつたので、とう〳〵御髪をそつて、法皇になりになつた、そこで法皇の近臣たちのなかで、このありさまをなげく人々は、僧俊寛の鹿谷の別莊によりあつまつて、ひそかに平氏をほろぼそうと、そうだんしていた。清盛はこれを

重盛父をいさめた

清盛の不忠

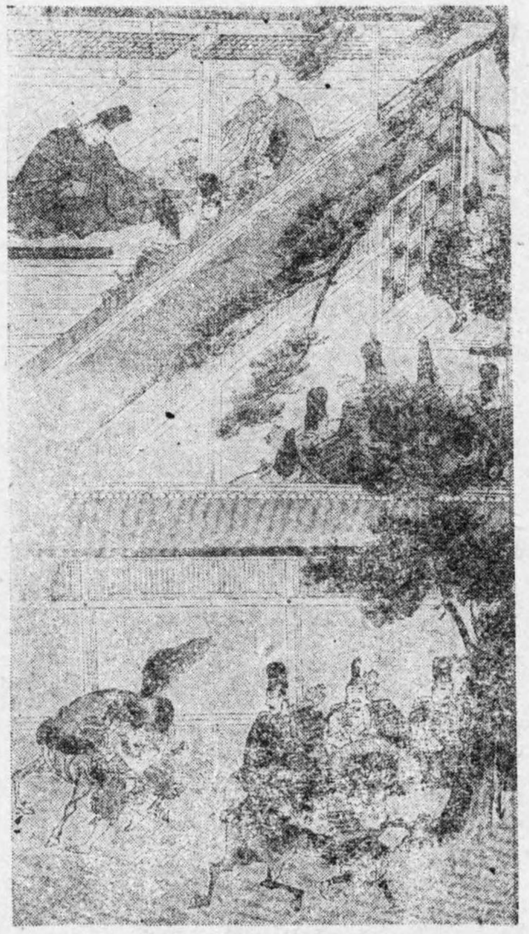
しつておういにいかり、その人々をとらえて、すぐきりころそうとした。重盛は忠孝の心のふかい人であるから、私の怨で役人をころすのは、よくありません。ことに、わがいえは、いまがもつともいきおいのさかんなときですから、尚更よい行をして、子孫が榮えるようにしていただかねばなりません。たとい お氣にいらないことがあつても、けつして、わがまゝなことを、なさらないで どうか子孫のためとおもわれて、がまんしていただきたいものです。」と涙ながらに父をいさめた。

けれども清盛の立腹は、なおやまず、おそれおうくも法皇をおしこめもうそうとして、一族をよびよせたので、人々はみないかめしく軍の仕度して、その邸にあつまつた。ところが重盛一人は、ふだんの裝束のまゝで、おくれてきた。弟の宗盛がこれをみて、そつと袖をひいて、「これほどの大事なばあいに、なぜ武裝をなさらないのですか、父上もはやくから鎧をきていられます。そ」と注

重盛ふたゝび父をいさめた

意した。

すると重盛は、「大事とは何事か、いつたい朝敵（朝廷にてきたいするもの）はどこにいるのか。自分は近衛大將であるから、朝廷に大事のないかぎり、めつたに武裝はできない。」と、きつくいましめた。清盛はこれをきいて、はずかしくおもつたか、今更鎧をぬぐいとまもないので、いそいで法衣をひつかけて、重盛にあい。わざとおちつ



平重盛が父清盛の不忠をいさめた

いたふりをしていた。けれども鎧の金物は襟のあいだから、ちら〳〵とみえていた。

重盛は、はら〳〵と涙をながしながら、「恩をしつてこそ人といえるので、しらないものは鳥やけだものとおなじです。恩のなかでも、一ばんおもいのは、君のご恩です。ましてわが家は、桓武天皇の御末でありながら、なかごろたいへんおとろえていたところ、父上になつておういに立身出世せられ、われ〳〵のような、おろかなものでも、高い官位をいたゞいているのは、これまつたく君の恩ではありませんか、いまこのごおんをわすれて、天皇の御威光をかろんじもうすようなことがあつては、たちまち神罰をうけ、一族はやがてほろびてしまうでしょう。それでもなお、父上がお聞いれなさらないなら、私は兵をひきいて法皇をおまもりせねばなりません。しかし又父上にてむかうことも子としての私には、堪えられません。それゆえ、父上がどうしても企をなしとげようとなさるなら、まず私の首をはねてからにして下さい。」とまごゝろこめていさめたので、さすがの清盛も、しばらくはおもいとゞまるようになつた。重盛のような人こそ、まことに忠孝のみちを、まつたくした、りつぱな人とゆうべきである。

第三十一　源頼朝の旗上げ

暗夜に鵺を射て、
郭公名をば雲井にあぐるかな、
弓はり月のいるにまかせて。

と後の世までもその名の知られた。源三位入道源頼政は、重盛がなくなつてのち、清盛が、ます〳〵わがまゝなふるまいをして、おそれおうくも後白河法皇をおしこめもうすようなことをしたので、おういになげき、どうしても平氏

頼政が兵をあげた

をほろぼして、法皇をおすくいもうしあげたいとかんがえて、法皇の御子以仁王をいたゞいて、兵をあげようとはかり、王のいゝつけを國々の源氏へつたえた。

ところが兵士がまだあつまらないうちに、頼政は宇治の戰にまけて、

埋木の花咲くこともなかりしに、
身のなるはてぞかなしかりける。

とゆう辭世の歌をのこして自殺した、王も矢にあたつてなくなられた、けれども、これから源頼朝をはじめ、國々にかくれていた源氏は、王のいゝつけにしたがつて、一度に奮いおこつた。

伊豆の蛭ケ島に流された時には、頼朝はまだ十四歳の子供であつたが、月日は流れて今では三十あまりの男盛となつた。其の地の豪族（いきおいのよい地方の武士）北條時政のせわになつてしずかに回復の時期をまつていた。そこへ

頼朝が兵をおこした

富士川の對陣

以仁王からのいゝつけをうけたので、時政らと、兵をおこした。けれどもまだ從うものがすくなかつたので、石橋山の戰にはさん〳〵に破れて、頼朝は杉山のなかにかくれ、やつと難を、のがれた程であつたが、再び兵をおこすと、源氏の恩義をうけていた、東國の武士はあらそうて味方に參りその勢は日に〳〵盛になりはやくも、その地方をたいらげ、ついに鎌倉を根據とした。

清盛は頼朝の旗上をきいて「あの青二才奴！　命を助けてやつた恩もわすれて。」と、大變に腹をたてゝ、すぐ孫の維盛を大將として七萬人ばかりの兵隊をやつて頼朝をうたせた。

頼朝は、兵二十萬をひきいて駿河にすゝみ、平氏の軍と富士川をはさんで陣をとつた。ある夜源氏の一隊が、こつそり平氏の軍のうしろへまわろうとしたところ、あたりの沼にいたたくさんの水鳥がびつくりして、いちどにぱつととびたつた。平氏の軍はその羽音に、敵兵がせめよせてきたものと思い、大將を

はじめみな〳〵あわてゝ甲冑、弓矢をなげすて、逃げかえつて後の世までも、腰拔武士と笑われるようになつた。

けれども賴朝は、これをおつかけないで、なおこのうえとも東國をかためおこうとかんがえ、兵士をまとめて鎌倉にひきかえそうとした。ちようどこのとき、弟の義經が、はる〳〵奥州から、賴朝をたづねてきた。

父義朝が平治の亂に平氏にほろぼされ、母常盤がつれていた三人の子供のなかの一番小さい牛若が、七歳のとき鞍馬山に上り寺におつたが、十一歳のとき自分が源氏の血筋をひいていることを知り、「よし自分はお坊さんなどになることをよして、どうしても平家を亡ぼして、源氏の恥をそゝいでやろう」と決心し、晝は一生懸命に勉強し、夜になるとこつそり寺をぬけだして、まごころこめて劍術の稽古をした。

京都五條の橋の上で、武藏坊辨慶を降參させた話はこのころのことであろう

十六歳のとき奥州の金商人吉次につれられて、ひそかに陸奥をさしてくだつた。近江の鏡の宿で自ら元服して、名を義經とあらため、源九郎といつた。其の夜宿屋に打入た、熊坂長範等の强盜數人をきりころしたことがあつた。

遂に奥州に下つて、藤原秀衡に賴ると、秀衡は義經がわざ〳〵自分を賴つてきたことを、この上なくよろこんで、あつくもてなした。そこで時機のくるのをまつていた。

賴朝が兵をあげたので、兄をたすけるために武藏坊辨慶や、伊勢三郎義盛、佐藤三郎嗣信などの重だつた家來三百餘騎をひきつれて、いそいで上つてきたのであつた。

賴朝は義經にあつてたいへんよろこび、先祖の義家と義光の兄弟對面の昔話をして、弟の手をとつて、うれしなきに泣いたとゆうことである。

第三十二　平家の沒落

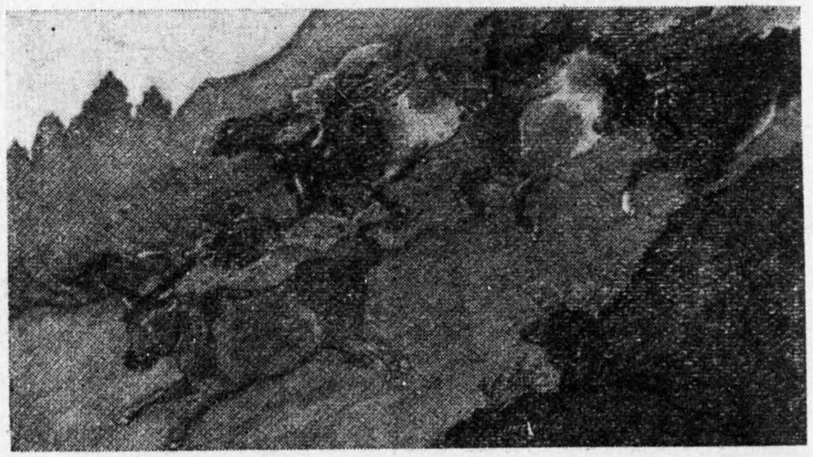
祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。奢れる者は久しからず、唯春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ。偏に風の前の塵に同じ。」

とは平家一門の盛衰（さかんになつたりおとろえたり）をかいた、平家物語の本のはじめにでゝいる。昔から一家一門の盛衰は多いが、平氏のようにはやく榮えて、またはやく亡んだものはない。

賴朝の從弟の義仲は二歳のとき父に死にわかれ、齋藤實盛にたすけられて、信濃の木曾山中でそだつたので、木曾冠者といつた。

賴朝と同時に、兵をおこした。そうして、信濃から北國に攻入つた。越中の倶利加羅谷で、維盛の大軍を、夜に乘じ牛四五百匹の角に松明を結びつけ、鬨

源義仲が兵をあげた



倶利加羅谷の戰

をつくつて攻めかけて、さんざんにうちやぶり、ひといきに京都に攻め上つた。

齋藤實盛が髮を染めて、一人ふみとゞまつて、手塚太郎光盛に首をとられたのは、篠原の戰の時であつた。

このとき清盛はひどい熱病のために死んでいたので、その子の宗盛が、一族とともに第八十一代安德天皇をいただいて西國へおちていつた。

それに入れかわつて義仲は京都に入り、後白河法皇から平氏をうてとのおうせをうけた。けれども、勢にまかせて亂暴な行が

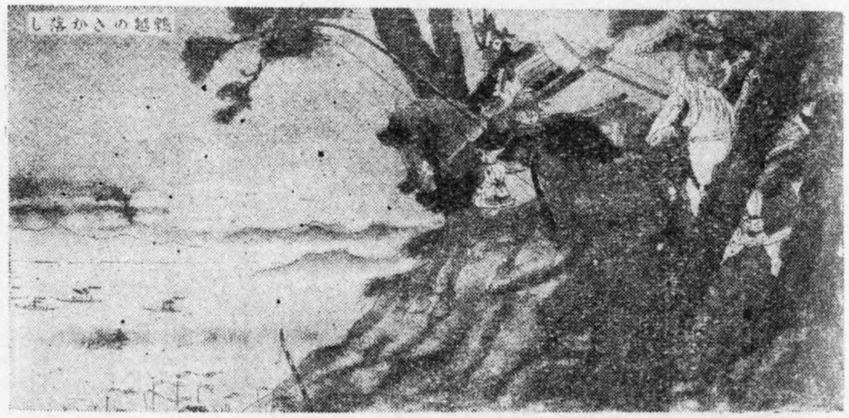
おうく、のちには法皇にそむいて、その御所をおそうようなことまでした。

そこで、頼朝は弟の範頼、義經を京都にやつてこれを討たせた。

このとき佐々木高綱と梶原景季とは、めい〳〵、頼朝から、池月と磨墨とをいたゞいて、宇治川の先陣を爭つたが、高綱は景季が馬の腹帶をしめなおす間に追越して第一ばんにわたつて、宇治川先陣の名乘をあげ、つゞいて梶原景季、畠山重忠等全軍殘らず渡つて大いに義仲の軍を破つた。

宇治川の先陣あらそい

義仲は、とう〳〵力つき、近江の粟津で、誤つて馬を深田に乘入れて果ない戰死をした部下の今井兼平も刀を含み馬上より逆に落ちて自刄した。義仲は兵をあげてから僅に三年



鵯越のさかおとし

で、朝日將軍義仲の名もまことにはかないものであつた。

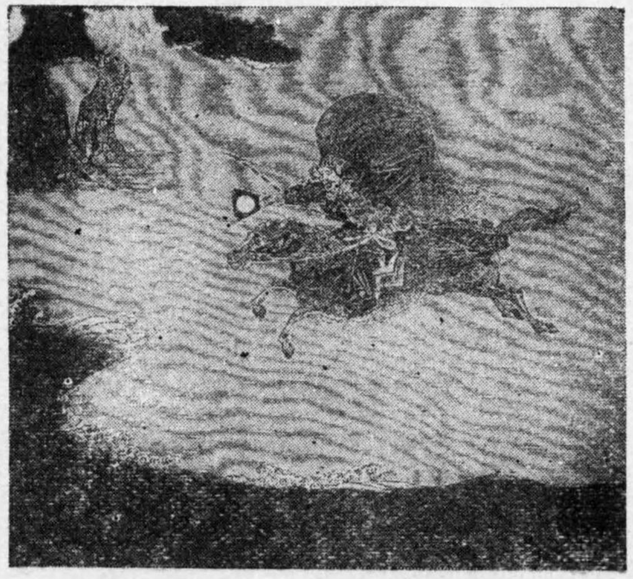
源氏の内輪爭をしている間に、平氏はふたゝび、勢をもりかえして、攝津福原にひきかえしてきた。

頼朝は、さらに範頼、義經をして、これをうたせた、範頼は生田森から攻め、義經は一谷の後の鵯越に向つたが、日は暮れ山路は嶮岨でなか〳〵進めない。そこで辨慶が經春を探し出して、道案内をさせ、「鹿も四足、馬も四足。鹿の越えゆく坂道を馬の越えない道理はない」といつて義經がまつさきにたつて

進んだ。

平家の陣屋を見おろすと、赤旗白旗入亂れて、戰のまつさいちゆう、そこへ義經の三千騎が坂落しに不意にせめたてたので、平氏の軍はたちまち敗れて、宗盛は天皇をいたゞいて讃岐の屋島ににげた。

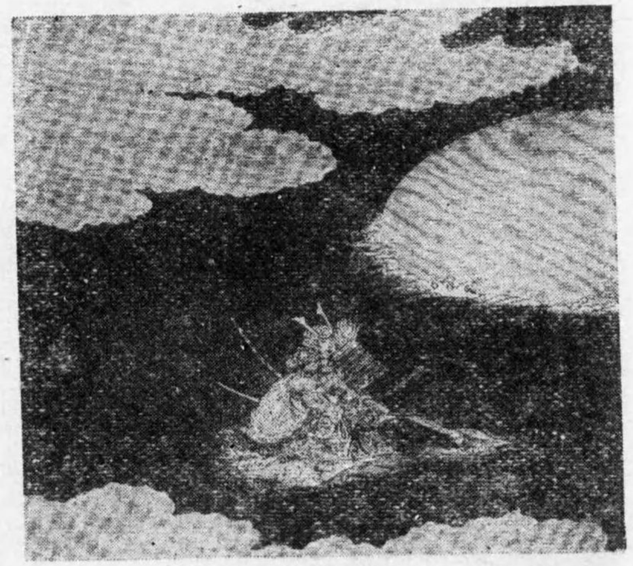
其の時、平敦盛は、たゞ一人舟にのりおくれたので、馬に乘つたまゝ海にかけいり、味方の舟におよぎつこうとしていた。すると義經の部下の熊谷次郎直實が、扇をあげて、これをよびかえした。



一谷の戰

敦盛は少年ながら、おゝしくも、すぐ馬をひきかえして、直實と組打をしたが、力つきて首をうたれた。敦盛のような人こそ、まことにけなゝ若武者とゆうべきであろう、直實もまた、敦盛のあとを弔つたとゆう、なさけ深い武士であつた。

義經は大風をものともせず、景時のいつた逆櫓もとりいれず、舟を出して四國に渡り、たゞちに屋島の城にせめよせて、これに火をつけた。ために、宗盛は、ふたたび天皇をいただいて、西にはしつた。



壇浦の戰

平氏がほろびた

那須餘一扇の的をいる

この戰に那須餘一宗高は、平家が舟に立てた、扇の的を射落して、後の世までもほまれをあげた。また奥州から義經の、ともをしてきた、勇士佐藤繼信は、義經の身代りとなり、敎經に射られて、忠烈な戰死をとげた。

義經は、またにげゆく平氏を、長門の壇浦においつめて、こゝで最後の決戰をした。

平氏の軍は、とう〳〵まけて、大將宗盛は、卑怯にも敵にとらわれたが、その他の一族は、みな戰死して、平氏はすつかりほろびてしまつた。

鎌倉幕府のもとがさだまる

このとき天皇は、ようやく八歳の御幼少でいらつしやつたが、清盛の妻二位の尼にだかれて、海におはいりになつた、まことにおそれおういおんことである。

清盛が大政大臣になつてから僅かに十八年目であつた。

第三十三　鎌倉幕府の創立

七百年の長い間、武家政治のもとをつくつたのは、頼朝が鎌倉に幕府（將軍が政治をとるところ）を置いたのにはじまる。

頼朝は東國をしたがえたときに、鎌倉を根據として、政治をしていつたので、幕府のもとがさだまつたのである。

頼朝は平氏を亡してから、全國を支配するようになつたが、兄弟一族にたい

頼朝が義経を殺させた

しては猜忌（そねみきらう）の心が深かつた。

義経は頼朝のために、平氏を亡ぼして、ひじようなてがらをたてたが、頼朝はかえつて義経を近よせず、義経は誓の手紙をだしても許されなかつたので、京都にかえつたが、頼朝の方から攻められてやぶれ、静が捕えられて鶴岡八幡宮で舞をまい義経を慕うたのも、この時である。終に義経は山伏の姿になり、道々難儀をして再び平泉にのがれ、秀衡にたよつていたが、秀衡の死んだ後、その子の泰衡は頼朝の勢におそれて、義経を攻めた。義経は衣川の館で辨慶や経春とともに戦死した。

ところが頼朝は、ながい間義経をかくまつていたことをせめて、みずから大軍をひきいて奥州をせめ、まもなく泰衡をもほろぼしてしまつた。

これから、日本國中は、まつたく頼朝の威勢になびきしたがつた。けれども頼朝は平氏の人々がおごつたために、わずかのあいだにほろびたことにかんがえあわせ、清盛らのように高い官位にのぼつて京都の人々とまじわることをさけ、鎌倉にいて質素な生活をし部下のものにも倹約をすゝめ、またいつも武藝をはげまし、富士の裾野や、と

頼朝の政治

頼朝が富士の裾野で狩をもよおしたし

ころ〳〵にたび〳〵狩をもようしたりして、武士の勇氣を養うことに力をいれた。仁田四郎忠常が頼朝の前近くきた猪を刺し殺したことや、曾我十郎祐成と弟五郎時致が父河津三郎祐泰の仇工藤左衛門尉祐經を討つたのもそのころのことである。

紀元一千八百五十二年西暦一千百九十二年に、頼朝は征夷大將軍ににんぜられて、とう〳〵日本國中の政治をとりおこなうことになつた。

これからおよそ七百年のあいだ、武家の政治がつゞいて、おそれおちくも、朝廷の御威光はいよ〳〵おとろえられた。

- 源満仲
  - 頼光……頼政
  - 頼信……爲義
    - 義朝
      - 頼朝
        - 頼家
          - 公曉
        - 範頼
        - 實朝
      - 義經
    - 義賢
      - 義仲

第三十四　源氏の滅亡

三代將軍源實朝が、鶴ケ岡八幡宮に參拜して、石段を下りて行くとき、傍の大きな銀杏の木の蔭に隠れていた、別當公曉のために殺されて、頼朝―頼家―實朝三代の將軍時代は僅かに二十八年間で源氏の血統とゆうものは、全く絶えてしまつた。

もと〳〵頼朝は疑ぶかい性質で、一族のものと仲が惡く、義經をほろぼしたのちは、また範頼をもうたがつて殺させてしまつたので、源氏の勢は自然とおとろえていつた。

源實朝公曉に殺さる

ところが頼朝の舅の北條時政は、頼朝がはじめて兵をおこしたときから、これをたすけて、おういにはたらき、のちには幕府の政治にもあづかつたので、そのいきおいはたいへんにつよかつた。

それで頼朝がなくなつたのち、長子の頼家が將軍となると、まもなく時政のためにやめさせられて、殺されてしまつた。時に頼家は二十三歳であつた。

頼家の後へは弟の實朝が、將軍となつたが、頼るべきものは大方亡んでしまつて、殆んど孤立の有樣であつた。ことに時政の子の義時が、いろ〳〵と惡い考をおこして、とう〳〵公曉をだまして實朝を殺させ、公曉もまた義時が殺して源氏の血統を絶えさせてしまつたのである。

第三十五　承久の變

北條義時がおそれおうくも、三上皇を、遠い島々へお遷し奉つた、日本歴史がはじまつてから、例のない大事變が、この承久の變である。

實朝が殺されてのちは、義時は源氏の遠緣にあたるやつと二歳の頼經を京都から迎えて、名ばかり將軍として、じぶんが執權（將軍の下で實際の政治をとるやく）となつて實權をにぎりおもうぞんぶんにふるまつた。

このとき京都では安德天皇の御後は、第八十二代後鳥羽天皇が御位におつきになつたが、天皇の御位をおゆづりになつてからも上皇として長い間、政治をおとりになつた。そのあいだに御子の第八十三代土御門天皇、第八十四代順德天皇や、御孫の第八十五代仲恭天皇がつぎ〳〵におたちになつた。

後鳥羽上皇は英名の君でいらつしやつたから、幕府がかつてきまゝな政治をしていくのを、おいかりになつて、おりさえあつたら、政權を朝廷にとりもどそうとおかんがえになつていた。

たま〳〵頼朝の子孫がたえても、幕府の政治はもとのまゝであるうえに、義

北條義時の不忠

時はたびく上皇のおうせにそむいたので、上皇は仲恭天皇の承久三年にいよ〳〵國々の武士を、よびよせて、義時をおうたせになることゝなつた。

義時はこれをきいてたいそうおどろき、子の泰時らにいゝつけて、大軍をひきいて京都にのぼらせた。泰時は一人引かえして「かたじけなくも、天皇の御輿を先に立て、錦の御旗をあげられた、いかめしい行幸におあいしたら、どう致しましよう」と尋ねると、義時はすこしかんがえていたが、「よくも問うてくれた。天皇の御輿に向つて弓をひくことはできない。その時は、兜をぬぎ、弓の弦を切て、したがい奉れ、そうでなく天皇は、都におわして、軍兵のみ、きたり戰うなら、命をすて、千人が一人になるまでも戰えよ。」といつた。

泰時らは、官軍を尾張、美濃、近江の各地でやぶり。勢にまかせて京都にせめいつた。そうして義時は、上皇にお味方もうした人々をきつたり、ながしたりした、そのうえ、おそれおうくも、後鳥羽上皇を隱岐に、順德上皇を佐渡

六波羅府

隱岐の御所

に、土御門上皇を土佐におうつしもうしあげ、また仲恭天皇を廢して第八十六代後堀河天皇をおたてもうした、世にこれを承久の變といつている。

天皇の御心にそむいて、みだりに兵をあげて京都をさわがし、しかも天皇を廢立（天皇をはいし新らしい天皇をたて奉る）もうしたり、三上皇をおうつしもうしたことは、古今に例のない大事變で、義時の不忠、不義はまことに、にくみてもあまりありとゆうべきである。

かように後鳥羽上皇の御志もむだとなり、こののち北條氏は、一族のものをかわるく京都の六波羅において、畿内や西國の政治をおこなわせ、そのいきおいは、ますく盛んになるばかりであつた。そのあいだ三上皇は、はるかに都のそらを、おしたいなされつゝ、つらい年月を遠い島々でおすごしになつて、そのまゝおかくれになつた。とりわけ、後鳥羽上皇の隱岐の御所は、やつと雨風をおしのぎになれるくらいの假屋であつたので、しお風のはげしく吹い

隱岐の御所

ていたとき。

われこそは新島守よおきの海の
あらきなみ風こころして吹け

（自分は新しい島の番人である、まだあらい風になれないから、隱岐の海の波風よ静かに吹いてくれよ）

とおよみになつた。上皇は十九年のながいあいだ、こゝにいらつしやつて、とう〳〵御年六十でおかくれになつた。

これを佐渡の島でつたえきかせられた。順德上皇は、あけくれ御涙にくれておいでになつたが、三年の後には、御みずから御

食事をたつて、おかくれになつた。まことに〳〵もうしあげようもない、おそれおういおんことである。

北條時政―┬―政子（頼朝の妻）
　　└―義時―泰時―時氏―時頼―時宗―貞時―高時

第三十六　北條時頼の諸國行脚

我儘の限りをつくした義時が死んで、子の泰時は父に似ない評判のよい人で「こんどの執權様はよい人だ。」と人々から好かれた。其の子の時頼は有名な松下禪尼とゆう母に育てられたので、大變立派な人であつた。

時頼ははやくから執權職を其の子の時宗にゆずつて、出家をして最明寺と呼び、地方にどれだけ北條氏の政治が行き渡つているかをしらべるため、わざとみすぼらしい旅僧の姿にかえて、こつそり鎌倉を出發した。

ある雪の降る夕方、時頼は上野國の佐野の渡に參つた。生憎と大雪で、その上日暮に間もない頃であつたから、どこか近くの家に一晩泊めて貰おうと思つて或る家の前に立つて案内を乞うた。そして、

「私は旅の僧のものでございますが、雪に降りこめられてこまつています、どうか今夜一晩だけお泊めくださいませんでしようか。」

と、時頼は、言葉を低くして頼んだ。家から出て來た女は、時頼の姿を見ると氣の毒そうに、

「お安いことではございますが、今一寸主人が留守ですから、御返事申しかねます。」といつた。

時頼は仕方なく、主人のかえるまで門口にまつていた。やがて主人がかえつたので、前に女に頼んだとおなじように、一夜の宿を乞うた。

「さて〳〵お氣の毒なこと、しかし私達の家はごらんの通りのあばら家でございますので、お泊め申してもお着せする布團もございません。これから少し向うに行くと、一寸した村がありますから、折角ではございますが、そこまでいらつしては。」

主人は、時頼に向つて、そういつて、じつとうつむいていた。

そこで時頼は、再びとぼ〳〵と雪の中を歩きだした。しばらくいつたとき、さつきの主人が時頼を追つかけてきて、

「さき程はまことに失禮なことを申し上げました。この雪の中を次の村までお出になるのは、大變でございます。何もおかまい出來ませんけれども、あんなあばら家でもよかつたら、どうぞお泊り下さいませ。」

といつた。時頼は、その親切にお禮をいゝながら、再びさつきの家へ引きかえして、その家に泊ることにした。

夜がふけるにつれて寒さは身に泌む、けれども僅ばかりあつた薪は、みんな

梅、松、櫻を燃やす

爐で燃やしてしまつたので、主人は何か薪にするものはないかと思案の後、思いついたのは、梅と松と櫻の植木鉢をもつてきて、それを燃やそうとした。

「あゝ見れば大切な植木、私のためになら、どうぞ燃やさないで下さい」

と時頼は見かねて、それをとめた。すると、主人は、「このように落ちぶれてしまつたものには、こんな植木などは、用のないものです」と言つて惜氣もなく、爐の中に入れて燃やした。

時頼は感心な人もあるものだと思つて、折を見はからつて名前をきくと。最初はなか〳〵いわなかつたが、あきらめたように、

「佐野源左衛門常世のなれの果でございます、一族の惡者達のために、みんな土地を横どりにされてしまつて、今は見るかげもなくおちぶれていますが、いかにおちぶれても武士のはしくれ、いざ鎌倉とゆう時には、いつでもかけつけることの出來るように、ちやんと馬を一匹と鎧兜を一領と、それからこの薙

刀とを用意して居ります。」

と壁にかゝつた薙刀を指しながらいつた。

時頼は、旅の僧をよそおつていたので、「まことに感心なことでございます。」と、たゞ一口言つたきりで、翌日になつてお禮をいつてその家を出かけた。

こうして、時頼は諸國を行脚して鎌倉に歸つてくると、あるとき關東にいる武士達に大至急鎌倉へ集つてくるように布れをだした。

その布れに應じて、何事があるのかと、澤山の武士達が集つてきたが、その中には、前に時頼が一夜の宿を乞うた佐野源左衛門が、そのときにいつた通りやせ馬に跨つてかけつけていたので、時頼は、早速、源左衛門をよびだして、雪の夜、秘藏の鉢の木を燃やしてもてなしてくれたお禮として、改めて、土地を與えた。

時頼は、諸國行脚の途中でまだこの外に、惡い役人を罰したり澤山の氣の毒

な人達を助けたりした。

第三十七　文永、弘安の役

時頼の子の時宗は相模太郎といつて豪氣なうまれつきであつた。十八歳で執權となり幕府の政治をおこなうようになつた。

成吉思汗

この頃支那の北の方の蒙古とゆう國に成吉思汗とゆう英雄がいて、しきりにあたりの國をせめとつて、西はいまのロシヤの西南部から東は朝鮮半島にまでいきおいをのばしてきた、ときに半島では、新羅はすでにほろんで、高麗がこれにかわつていた。

時宗元の使をかえす

成吉思汗の子の忽必烈は國の名を元と改め、日本をしたがえようとして、高麗王にいゝつけて無禮な手紙をおくらせてきた。時宗は、これをみると、おういにいかつて、その使をおいかえしてしまつた。

文永の役

第九十一代後宇多天皇の文永十一年の秋、元は、高麗の軍をあわせて、四萬の大軍で對馬や壹岐に寇し、たちまち筑前におしよせて博多附近に上陸した。

時宗の決心

日本の將士は少しもおそれず、死にものぐるいになつて戰い、よくふせいだ、すると急に大風が起つて、山のような大波が海上をあれ狂うたので元の船は何隻も沈んでしまつて、とう〳〵にげさつた。世にこれを、文永の役とゆうのである。

弘安の役

けれども、元のいきおいはます〳〵つよくなつて、また使を日本におくつてきた。ところが時宗の決心はいよ〳〵かたく、家來にいゝつけてその使をきらせた。そのうえ博多灣の海岸に石壘（石をつみあげてつくつたとりで）をきずき、敵軍がせめてくれば、いつでもむかえうてるように用意をさせた。

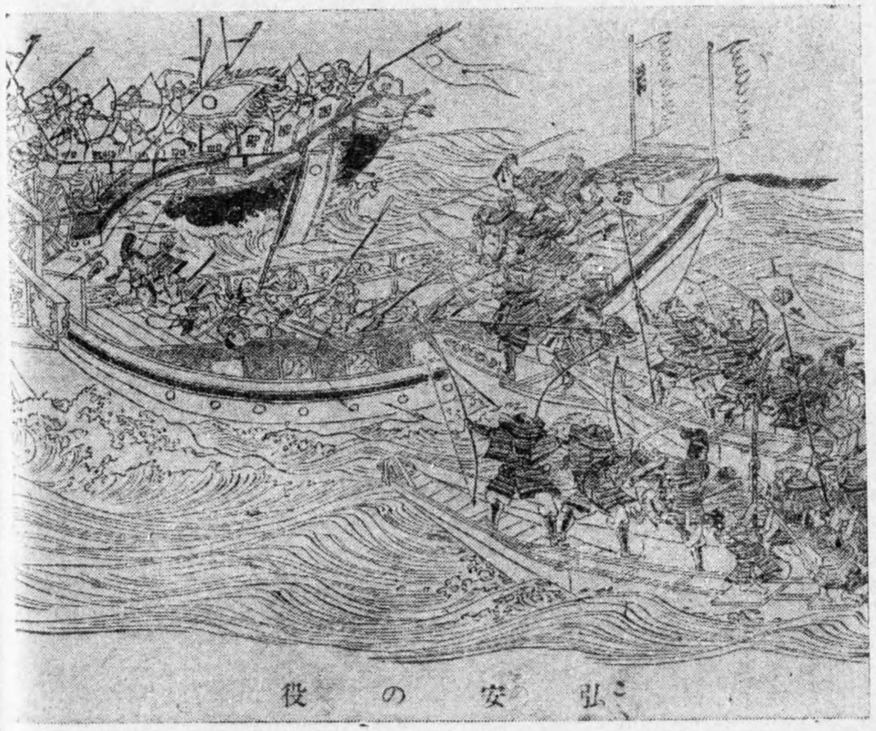
弘安四年に四萬の兵を朝鮮半島からふたゝび、筑前にさしむけ、べつに支那からは十萬の大兵をだした。

上下心を合せて元寇を討ちやぶる

時宗は日本國中に布れを出して、兵隊を九州に向わせた。

亀山上皇はたいそう御心配になり、おそれおうくも、とうとい御身をもつて國難におかわりなさろうと、伊勢の神宮にお祈りになつた。

朝鮮半島からきた敵兵は、壹岐をおかして、博多にせめよせてきたが、



弘安の役

神風ふきおこる

菊池武房や、河野通有、竹崎季長らの勇士は、石壘にたてこもつて、ふせいだり、勇敢にも敵艦へ斬りこんだりして、おういにこれをくるしめた。そのうちに支那からきた大軍がこれといつしよになつて、今にもせめよせてこようとした。そのときもまた、にわかに、神風がふきおこつて、敵艦の大部分は沈没し、溺れて死ぬものはかぞえきれないくらいであつた。おうくの大將らは、われさきにとにげさり、とりのこされた兵士は肥前の鷹島にあつまつたが、それもころされたり、とらえられたりして、その軍はまつたくほろびてしまつた、世にこれを弘安の役とゆうのである。

これからのち元は二度と日本にせめてくることができなかつた。

第百二十二代明治天皇は、時宗の大功をおほめになつて、特に從一位をおくりになつた。

第三十八　北條氏の滅亡

北條氏の勢も時宗の時代を最後として次第に衰えて、とう〳〵高時になつて賊將として亡んでしまつた。

高時は時宗の孫であつたが、おろかなうまれつきで、政治をおこたつて、夜も晝も遊びに耽つて、時には數千匹の犬をあつめて、そのかみあいをけんぶつしたり、澤山の藝人を集めて舞せたり踊らせたりして樂しんでいたので、たいへん人望をうしなつた。

そのころ朝廷には、第九十六代後醍醐天皇が御位におつきになつていた。天皇は、後宇多天皇の御子で大變賢明な御方であらせられたから、はやくから鎌倉幕府のわがまゝをおいかりになつて、御鳥羽上皇の御志をついで、政權を朝廷にとりもどそうと、おかんがえになりひそかに武士をお召しになつた。と

天皇笠置山に行幸

楠正成が行在所にまいつた

天皇が隱岐におうつされになつた

ころが、高時がこれを知つておういにおどろいて、急に兵を京都へのぼらせてきた。天皇はこれをおさけになつて、山城の笠置山に行幸をなさつた。

天皇は御夢に楠木とゆう武士を賴めとのお告をうけられて、河内の國、金剛山の麓にすんでいた楠木正成をお召しになつた。正成は天皇に拜謁して、「賊軍がどんなにつよくても謀をめぐらせば、これをうちやぶることは、さほどむづかしくはありません。けれども勝敗は時の運でありますから、たまにはやぶれることがあつても、けつしてごしんぱいくださいますな、正成一人が生きていると仰せ下さつたら、御運はいつか、おひらけになるものと御心をやすらかにしていらつしやるようにおねがいもうします」と力づよくもうしあげた。

それから、河内にかえつて赤坂に城をきずき、天皇をおむかえもうそうとしたが、まもなく、賊軍が笠置をおとしいれてしまつた。

天皇は、藤原藤房らを、したがえられ、御徒歩で笠置をおのがれになつたが、

そのとちゆうのごなんぎは、まことにおそれおうく、晝はかくれ、よるになると、あてもなくさまよわせられる、おんありさまであつた。おともの藤房らは、三日のあいだ食事をしなかつたため、身も心もすつかりつかれはてゝ、しばらく木かげにやすんでいた。そのときこずえの露がおちて、天皇の御衣をぬらしたので、天皇は、

さしてゆく笠置の山をいでしより
あめがしたにわかくれがもなし

笠置おちぬ

とおよみになつた。藤房はもつたいなさに涙をおさえながら、

いかにせん頼むかげとて立寄れば、

なお袖ぬらす松の下露

とお答えもうしあげた、まもなく天皇は、賊兵にとらわれて、隱岐の島におうつされになつた。

一天萬乘の君を遷し奉る武家の運命も、今につきると憤らぬものはなかつた。備後の國に兒島三郎高德とゆう人があつた。天皇が隱岐の國へ遷されもうすときいて、一族のものとともに、お待ちして、君を奪い奉つゝて忠義を盡そうとしたが、道がちがつたため、ついに目的を達することができなかつた。

隱岐の行宮へしのび入つて櫻の木を削り、

天莫レ空ニ勿踐一　時非レ無ニ茫蠡一

と一句の詩をかきつけた。

天皇はすぐその心をおさとりになつておよろこびなされた。

笠置がやぶれたのち賊軍は赤坂城を十重二十重にかこんだ。ひつそりと人聲

のない小さな城であるから一息で城の中へ飛びこもうとしたとき、急に物の蔭から何千本の矢がヒユウ〳〵と飛んできて忽ち死人の山をきづいた。けれども三十萬からの賊軍であるからふたゝび攻め寄せた。こんどは釣塀の計略にかゝつて塀と一緒に石垣の下へ落ちてひどい目にあわされた。第三回目には熱湯を浴びせかけられて、大怪我をしたものが數しれない程であつた。

そこで賊は兵糧攻めにしようとしたので、正成は城に火をつけて、自殺したように見せかけて、夜の中にこつそりと金剛山に姿をかくした。

大塔宮護良親王もまた吉野にたてこもつて、義兵をおつのりになつた。あるとき般若寺に忍んでいられたが、附き奉るものゝ留守中に賊兵が不意によせて來た、大般若經の唐櫃三個あつて一つの櫃は、御經を半分程とり出してあつたので、其の中へお隠れになつた。賊兵は蓋のしてある二つの櫃を底をかえしてみたが、居られないので其まゝ寺を出て行つた。宮は若し立かえつて委しくさ

がす事があるかもしれないと思われて、前に兵のさがした方に入替つていられると、案の如く立かえつて蓋のあいた方のお經をみなとり出してみたが、矢張居られなかつたので出て行つた。

吉野に立て籠もつた官軍は最後までよく戰つたが、賊は多勢のことではあるし、宮も今は逃れぬ所と思召して、最後の御酒宴をなさつた。村上彦四郎義光は、鎧に十六筋の矢が立つたまゝ御前にすゝみ「今はとても此の城を保つ事は出來ません。おそれながら召されまする錦の御直垂と御物具とを賜わり、御名を冒して、御命に代り奉りますから一先御逃れあそばしませ。」と、強いておすゝめもうして、宮が遠く御姿を隔てられたころ。身を現わして大音聲に「我は大塔宮護良親王である、唯今自害する有様を見ておき、汝らが武運つきて腹切る時の手本にせよ。」と鎧を脱いで投落し、双肌ぬいで腹かき切り。太刀をくわえてうつぶしに伏した。宮は恙なく天川へと落ちられた。

正成千早城にたてこもる

一方正成は僅な兵をひきいて千早城にたてこもり、雲霞と押し寄せてくる賊軍に大石を投げかけて、一度に數千人を殺し、あるときには藁人形を作つて敵をおびきよせて大石をなげつけ、敵が長い梯子をつくつて城のなかへ押し入ろうとしたとき、投松明と油とを梯子に投げつけて、澤山の賊軍を梯子もろとも燒き殺してしまつたなど一々數えたてると際限がない。

楠木正成千早城にて賊軍をなやます

このあいだに、國々では親王の御命令をうけて、勤王の軍（忠義の軍）をお

名和長年天皇を船上山におむかえした

こすものがおうくなつた。

天皇はこの有樣をおきゝになると、ひそかに、隱岐から伯耆にわたつて、そのちの豪族名和長年をおめしになつた。長年は、天皇のおうせをうけて、おういに感激し、たゞちに一族をよびあつめて、このことをつたえた。みないづれもふるいたつて、「このたび天皇のおうせをいたゞいたことは、このうえもない、わが家の名譽である。天皇のおんためには、たとい屍を戰場にさらしても、名をのちの世にのこさねばならぬ。いそいでおむかえにまいろう。」といつて大いそぎで行宮（天皇のかりのごし

名和長年が天皇をお迎えしたし

尊氏六波羅をほろぼした

義貞鎌倉をおとしいれた

よ）を船上山につくり、こゝに天皇をおむかえして、兵をあつめて、おまもりもうしあげた。

そこで天皇は、おうぜいの大將をやつて六波羅をせめさせられた。高時はこれをきいて、おういにおどろき、足利尊氏らにいゝつけて、いそいで兵をひきいて京都へのぼらせた。ところが尊氏は源義家の子孫であるから、かねゝ北條氏のしたにいることを、不平におもつていた。それゆえ、このときにわかに朝廷にしたがい、勤王の人々とちからをあわせて、賊軍をうち、とう〳〵六波羅をおとしいれた。よつて天皇は、さつそく船上山をおでましになり、京都へお向いになつた。

新田義貞もまた、義家の子孫である、さきに賊軍にしたがつて千早城をせめたが、まえ〳〵から、朝廷にお味方しようとかんがえていた。そこで、ひそかに護良親王の御命令をうけると、病といつわつて、上野にかえり、義兵をおこした。

新田義貞稲村崎に劔を投ず

そうしておうくの兵をひきいて、三道から鎌倉をせめた。

義貞は稲村崎へ向つたが、砂濱の道がせまくて通れない。そこで義貞は馬からおりて冑をぬぎ、「願わくば潮を退けたまえ。」と伏拜んで、黄金作の太刀を拔いて、海中へ投げこんだ、すると月の入るころに、俄に潮が引いたので、鎌倉さして切りこんだ、鎌倉

勢はやぶれて高時は自殺し、こゝに北條氏も亡んで、
賴朝以來百四十年あまりつゞいた、鎌倉幕府も絶えてしまつた。

第三十九　建武中興

天皇京都へおかえりになつた

後醍醐天皇は六波羅が亡んだことをお聞きになつて、船上山から京都へ向わせられた。

天皇が、兵庫におつきになつたとき、義貞の使がきて、鎌倉を平げたことをもうしあげた。正成もまた七千餘騎の部下をひきいて兵庫まで天皇をお迎えにきた。天皇は正成をおそばちかくにおめしになつて、おういにそのてがらをおほめになり、正成を先頭にして、京都へおかえりになつた。

澤山の忠臣達がお迎えしたので、まことにさかんな御儀であつた。ときに紀元一千九百九十三年西暦一千三百三十三年であつた。

これから天皇は、おんみづから御政治をおこなわせられることになつた。

そうして護良親王は、その御てがらによつて、征夷大將軍におなりになり、尊氏、義貞、正成、長年らも、みなそれ〴〵あつく賞せられた。こうして政權はふたたび、昔のように朝廷にかえつた。このとき年號が建武とあらたまつたので、世にこれを建武の中興とゆうのである。

源義家―義國―
　―新田義重……朝氏―義貞―義顯
　―足利義康……貞氏―尊氏―義詮―義滿
　　―直義

第四十　尊氏の謀叛

武士のなかには、ながい間幕府の政治になれていたため、君臣の大義をわすれて、建武の中興をよろこばぬものがおうく、尊氏は、かねてから將軍になり

護良親王が害された

鎌倉宮

たいとのぞんでいたので、これら不平の武士をひそかに集めていた。

護良親王は、尊氏に謀叛心のあることをさとつて、はやくのぞこうとせられたが、尊氏の勢力がなか〳〵強かつたので、かえつて尊氏に讒言（つげぐち）せられ、これがために鎌倉におくられて、おしこめられたもうた。新田、楠木の諸氏がこれをお救いもうすことのできなかつたのは、いかに尊氏の勢がつよかつたかとゆうことがしられるのである。

このころ尊氏の弟の直義が、その地をおさめていたが、たま〳〵北條高時の子の時行が、兵をおこして、鎌倉をとりもどそうとした。このたゝかいに、直義はやぶれて鎌倉をにげだしたが、そのとき直義は、時行が親王を奉ぜんことをおそれて、おそれおうくも人をやつて親王をがいしたてまつゝた。親王の御年は、ときにまだ二十八であつた。

鎌倉宮は、親王をおまつりもうしあげたお社である。

尊氏がそむいた

尊氏兄弟が九州に走つた

尊氏は、征夷大將軍となつて、東國をおさめたいと、朝廷へおねがいもうしたが、まだそのお許のないうちに、かつてに鎌倉にくだつて時行をうちやぶり、まもなく朝廷にそむいて。自分にしたがうものに領地をあたえた。

天皇は尊氏、直義の官位をおとりあげになつて、義貞をやつて、これをおうたせになつた。ところが官軍は、竹の下や、箱根のたゝかいにやぶれてしりぞいたので、尊氏は直義とともに、京都へせめのぼつてきた。天皇はこれをさけて、しばし比叡山におでましになつた。けれどもこのころ天皇の御子義良親王をいたゞいて、奥州をまもつていた、北畠顯家も、また朝廷の御命令をうけ、親王のおともをして、兵をひきいて京都へ攻めのぼつてきた。そうして正成や義貞らと、力をあわせて、おういに賊軍をやぶり、尊氏や直義を西國へはしらせたので、天皇はふたたび、京都へおかえりになつた。

尊氏兄弟が京都へ攻上つた

第四十一　楠木正成

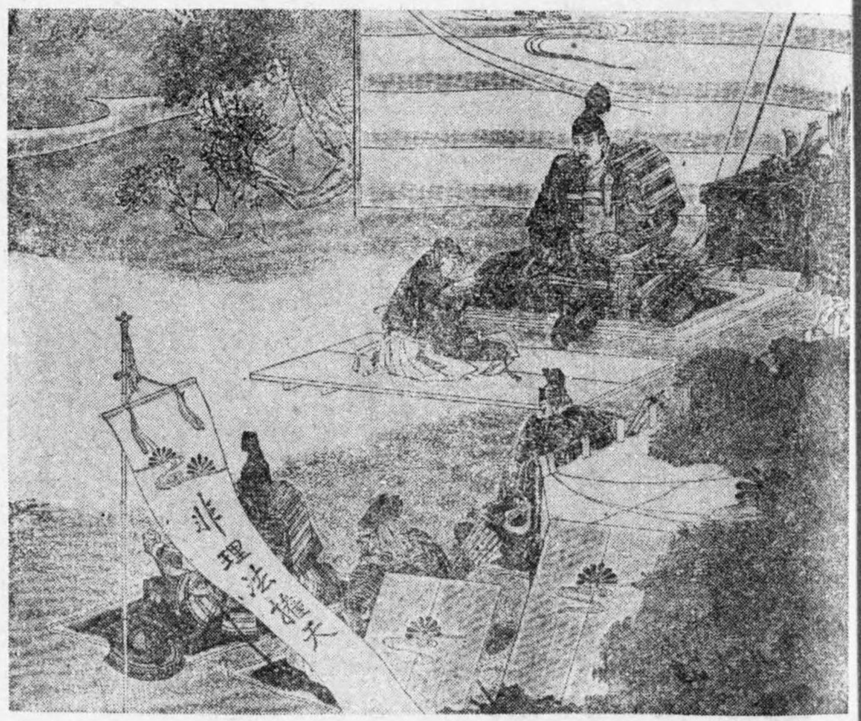
「嗚呼忠臣楠子之墓」は湊川神社とともにいつまでも、忠臣のかゞみとして崇められている。

尊氏は九州へいつて、わずかの間に勢をもりかえして、直義とともに、海陸の大軍をひきいて、京都へ攻め上つてきた。

その時官軍の一方の大將である、北畠顯家は奥州へかえつていたので、天皇は楠木正成と新田義貞とに兵庫で防ぐようにお命じになつた。

このとき正成は、しばらく賊のいきおいをさけ、そのいきおいがおとろえるのをまつて、いちどにほろぼそうとゆう、はかりごとをたてたが、天皇のおそばにいたものゝために退ぞけられてしまつた。それゆえ正成は京都をたつた途中、櫻井の驛についたとき、我子正行をよびよせて、かねて天皇からいただい

正成櫻井の驛で正行をさとす



櫻井の驛で正成父子の別れ

た、菊水の刀を自分の形見としてあたえて、

「お前も十一歳にもなつているのだから、よく父のゆうことをきゝわけてくれ、このたびの戰では味方が勝つことはむづかしいから、父はもう戰死をするものと覺悟をきめている。父が戰死をした後は、きつと足利尊氏が我儘をするにちがいな

い。尊氏は憎い賊軍の大將である。たとい父が死んでもお前はこの父の志をついで、大きくなつたらきつと尊氏を討つてくれよ。いまからは身を大切にして天皇に忠義をつくすことを忘れてはならぬ。これが何よりの孝行である。父のゆうことが、わかつたら、おとなしく河内國へ歸つて時節のくるのをまつていてくれ。」

「父上よくわかりました」と名殘りを惜みながら親子は西と東に涙の袂をわかつた。

正成はすゝんで湊川に陣をとり、直義の陸軍と戰つたが、そのあいだに尊氏の海軍も上陸して、うしろからせめかゝつてきた。正成はおういに奮戰した。けれども、かように前後に大敵をうけてはどうすることもできず、部下はたいてい戰死し、正成も身に十一箇所の傷をうけた。そこでもはやこれまでとかくごして、湊川のちかくにある民家にはいつて、自害しようとした。このとき弟の正季にむかつて「最後にのぞんで、なにかねがうことはないか。」と、たずねた。正季は、たゞちに「七度人間にうまれて、朝敵をほろぼしたいと思います。」正成はいかにも嬉しそうに、につこりわらつて、「自分もそう思つているぞ」といつて、兄弟たがいにさしあつて死んだ。

正成が湊川で戰死した

湊川神社

ときに正成は、年四十三であつた。いま正成をまつゝてある神戸の湊川神社は、正成の戰死した地で、德川光圀がその忠烈にかんじてたてた碑は社の境内にある。

日本國民は、みな正成のような眞心をもつて、國のために盡す覺悟がなければならぬ。

第四十二　新田義貞

湊川の戰に楠木正成は戰死し、新田義貞は敗れて京都へ退いたので、後醍

名和長年が戰死した

後醍醐天皇が吉野に行宮をお定めになつた

義貞が北國に向つた

醍天皇はふたゝび比叡山へ行幸をなされ、尊氏はすゝんで京都にいつた。官軍はこれを、とりかえそうとしたが、かえつて失敗して、名和長年等は戰死した。長年は、いま伯耆の名和神社に祀られてある。

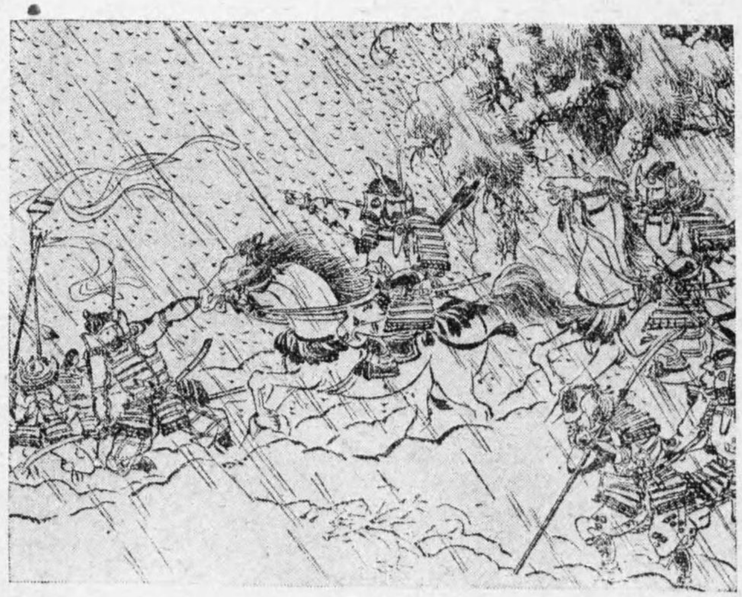
尊氏は賊の名をさけようとして、豐仁親王をたてゝ天皇ともうしあげていた。けれどもまもなくいつわつて、後醍醐天皇に京都へおかえりになるようおねがいもうしあげた。天皇はかりにこれを、おゆるしになつて京都へおかえりになつたが、まもなく三種の神器を奉じて、ひそかに吉野に行幸をなされ、行宮をこゝにおたてになつた。

さきに天皇は比叡山の行宮で、義貞をめして、皇太子恒良親王と皇子尊良親王とを奉じて、北國におもむいて回復をはかるよう、おうせつけになつた。義貞は涙を流して感激し、一族のもの七千餘騎をしたがえて、北國へ向つた。

とちゆう越前と若狹の境にある木目峠をこえるとき、ことに寒さははげしく、おりあしく大吹雪で、火もなく、宿もなく、たくさんの兵は凍え死んだ。

その上伊豫の河野、土居、得能の一族は道に迷い、にわかに敵にであつて、戰かおうとしたが、馬は雪にこゞえてすゝまず、寒さのために弓もひけず、太刀も握れず、進退きわまつて、主從三百人あまり、刀を地にたてゝうつぶしに貫ぬいて勇ましく死んでしまつた。

義貞はよう〳〵越前の敦賀につ



新田義貞が北國にむかつた

き、金崎城にたてこもつて、一時は勢をえたが、まもなく賊軍にかこまれて、城があやうくなつたので、長子の義顯をのこして城をまもらせ、自分は、杣山城にいつて兵をつのつたけれども、そのあいだに、兵糧がなくなつて、金崎城がおちいり、尊良親王は義顯とともに、御自害なさつた。

義貞か藤島で戰死した

皇太子は、とらわれて京都へおくられなさつたが、尊氏のために害せられたもうた。

義貞は、たび〳〵のふしあわせにもくじけず、杣山城からふるいたつて、しば〳〵賊軍を破つた。そののち藤島の戰に賊のいきおいが強くて、官軍はいまにも破れそうになつたので、自ら五十騎をひきいて、助にいつた。途中三百騎の敵兵にであい、おういに奮戰したが、乘つていた馬は矢を五筋もうけて、泥田の中にたおれたので、義貞はすぐおきあがろうとすると、そのとき運わるくとんできた一筋の矢が額にあたつた、さすがの義貞ももはやこれまでと、かくごして、みずから首をはねて、いさぎよく死んだ。ときに年三十八であつた。これから北國の官軍は、中心とたのむ大將をうしなつて、まつたくおとろえてしまつた。いま福井の藤島神社には義貞をまつられている。

第四十三　北畠親房と顯家

顯家が戰死した

尊氏が九州に走つてから、北畠顯家はふたゝび陸奥にくだり靈山城にたてこもつていたが、天皇が吉野へ行幸なさつたことをしると義良親王を奉じて、京都へむかい、途中で鎌倉を攻めて、尊氏の子義詮を破り、進んで京都を回復しようとしたが、兵は少なく、長い行軍で疲れていたので、北軍と戰つて利がなく、義良親王は吉野におはいりになつた。

顯家は、賊將高師直の軍と和泉で戰つて大敗し、ついに石津で戰死した。時に年ようやく二十一、官軍にとつてはまことに惜いことであつた。後醍醐天

皇は、その勳功をほめられて、從一位右大臣をおくられた。

大阪の阿部野神社、岩代の靈山神社には、父親房とともに祀られている。

後醍醐天皇は、顯家の父親房に命じて、また義良親王を奉じて陸奥にくだらせ、官軍のいきおいをとりもどそうと、おはかりになつた。

親房らは、伊勢から海路東にむかつたが、俄に大風が吹いて、親王の御船は伊勢に吹きもどされたので、其のまゝ吉野にお歸りになり、親房の船は常陸についた。

かように官軍のいきおいが、ふるわなかつたとき、天皇は御病におかゝりになり、義良親王第九十七代後村上天皇に三種の神器をお傳えになつて、朝敵をほろぼして、京都を回復するようにと仰せられ、御劍と法華經とを左右の御手に持たれてお崩れなされた。まことに御悼ましき極みである。

吉野山はたゞに花の都のみではなかつた。

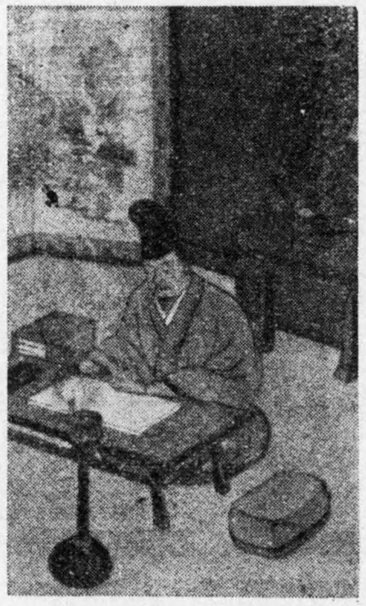
親房らが海路東國へ向つた

後醍醐天皇がおかくれになつた

親房が神皇正統記をあらわす

「歌書よりも軍書にかなし吉野山」とは、よくその趣きをあらわしている。

親房は常陸の關城へはいつてそれから陸奥へ下ろうとしたが、賊兵にかこまれた。晝夜賊をうつはかりごとをめぐらしながら、そのひま〳〵に神皇正統記をあらわし、天照大神から、後村上天皇にいたるまでの御血統の由來をのべて、君臣の大義（臣民の天皇にたいするつとめ）をあきらかにした。そのうちまもなく城がおちいつたので親房はのがれて、吉野にかえり、官軍の中心として、仕え奉つたが、病にかゝつてなくなつた、時に年六十三であつた。



親房神皇正統記をかく

村上天皇―具平親王……親房―顯家
　　　　　　　　　　　　　　―顯信
　　　　　　　　　　　　　　―顯能

親房がなくなつた

第四十四　楠木正行

君がため散れと教えて己れ先ず
　嵐に向う櫻井の里

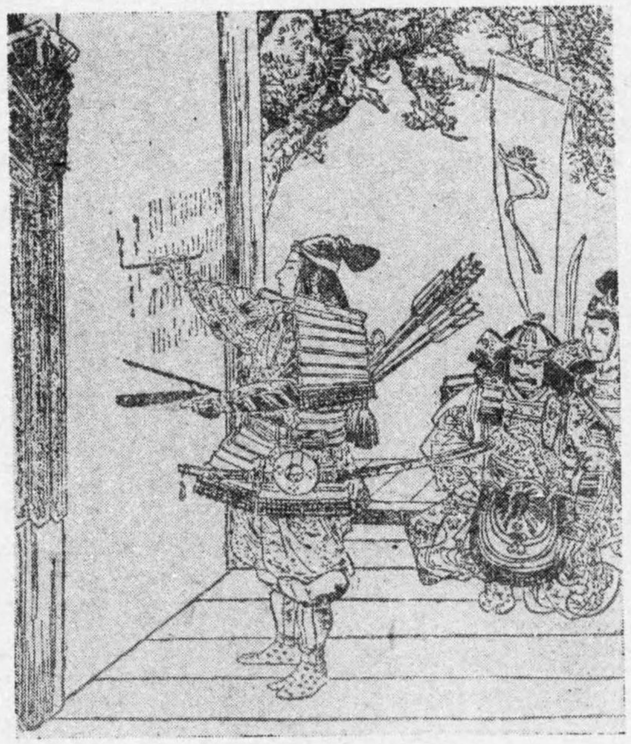
正行は櫻井の驛で父とわかれ、母のもとへ歸つた後、尊氏から送つてきた父の首をうけとつた。かねてから思い設けたことではあるが、あまりにも變りはてた、父親の姿をみると、たゞ悲しさの一念から、ふと立上つて佛間に行き、父の形見の刀を右手にもつて自害しようとした。母は急ぎ走りよつて、正行の小腕にとりついて、涙ながらに、「栴檀は二葉より芳しいとゆうことがある。お前は幼くても父の子であるなら、これほどの道理がわからぬことはあるまい。父がお前をかえしたのは、腹を切れといつたのではない。たとい父が死んでもお前はこの父の志をついで、大きくなつたら朝敵を亡ぼして君の御心をやすめ奉れといゝおかれたのではないか。」と泣きながらに諌めた。

その後は父の遺言と母の諌とをまもつて、つねゝ朝敵をほろぼそうと心がけて、一生けんめいにはげんだ。

成人してから、後村上天皇におつかえして、たびゝ賊軍と戰つて、これを破つた。攝津の瓜生野の戰では、賊兵がさきをあらそつてにげるとき、あわてゝ川へ落ちてながれるものが、五百人あまりもあつた。正行はたいへんきのどくに思い。部下にいゝつけて、これをすくわせ、親切にいたわつておくりかえした。こうゆうありさまで、官軍のいきおいは、ますゝつよくなつて、いまにも京都へせまろうとした。

尊氏は大いにおそれて、高師直にいゝつけて大兵をひきいて正行にあたらせた。

そこで正行は、たゞちに一族百四十人ばかりをつれて、吉野にまいつて。



楠木正成が歌を如意輪堂にかきとめたとき

首を彼等にとられますか、二つの中に戰を決しとうございます故、今生のおいとまごいに參上いたしました。」ともうしあげると、天皇は、「朕が今頼りとするのは、お前一人であるぞ、つゝしんで命を全うせよ。」との有難いお言葉をたまわつた。そうして天皇にお別を告た正行は、後醍醐天皇の御陵に參拜して御暇乞をもうし、如意輪堂の壁板に、一族の名をかきつらねて、そのすえに、

かえらじと、かねて思えば梓弓、
なき數にいる名をぞとゞむる。

とゆう歌をしるし、死を決して河内にかえり三千騎をひきいて、賊軍とおういに四條畷でたゝかつた。このとき正行はどうかして師直をうちとろうとかんがえ、たび〳〵其の陣にせまつたが、師直の部下が僞つて師直だといつて討死したので、そのとき身には多くの矢きづをうけ、力もつきはてたので、「今はこれまでぞ、敵の手にかゝるな。」といつて弟の正時と刺違えて死んだ。ときに正行は、年ようやく二十三であつた。前年正行にすくわれた賊兵は、ふかく其の恩にかんじ、正行にしたがつて、この戰でこと〴〵く討死した。實に正行のよ

正行四條畷で戰死した

正行の忠行兩全

うな人こそ、勇も仁もあり、りつぱな武士で忠孝の道を全うした、人といわねばならぬ。

かように楠木氏は、正行のしんだのちも、その一族は、みなまごゝろこめてながい間、朝廷の御ためにはたらいた、いまは四條畷神社に正行をまつゝてある。

武光が懐良親王をお迎えもうした

第四十五　筑後川の戰

正行や親房らの忠臣がつぎ〳〵になくなつて、國々の官軍はみなおとろえてしまつた。

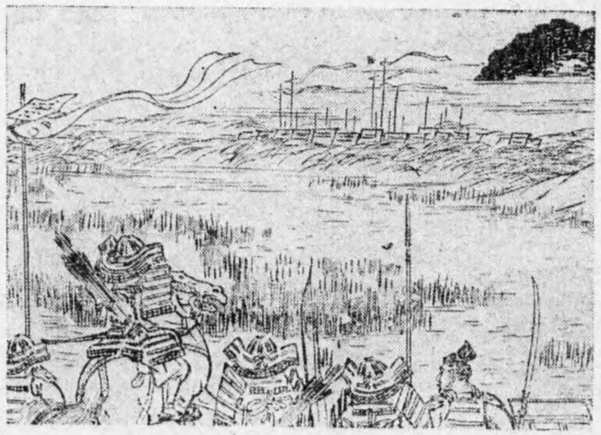
ひとり九州の菊池武時と其の子の武光は勤王の兵をおこしていたので、後村上天皇の御弟懐良親王は、西國の官軍を統べられるために、九州へおくだりになつた。武時の子の武光は、これを肥後におむかえもうし、親王をいただ

いて、たび〳〵賊軍とたゝかい、そのいきおいが、おい〳〵さかんになつた。

尊氏はみずから武光をうとうとしたが、でかけないうちに死んだ。

菊池氏の勢はます〳〵つよくなり、武光は、親王をいたゞいて、兵を筑後にすゝめ賊の大將少貳頼尚の軍と筑後川をはさんで陣をとつた。武光は川をわたつて戰をしかけたが、頼尚は陣をかとうしてなか〳〵戰わなかつた。

そこで武光は、親王といつしよに敵の中堅をめざしてつきすゝんだ、この戰はたいへんはげしく、親王は御身に三箇所までも傷をおわれ。武光は馬が傷き冑が裂けたが



筑後川の戰

敵の大將を斬り、その馬と冑とをとつて戰い大いに敵を破つた。世にこれを筑後川の戰とゆうのである。

武光はなおも親王をいたゞいて、筑前に進み、賴尙をはしらせて、大宰府へ入り、さらに京都へおしのぼろうとしたが、そののち、まもなく、なくなつた。せつかく勢がついた九州の官軍は、これからだん〳〵おとろえていつた。けれども武光の子孫は、なお長い間朝廷の御爲に力をつくした。肥後の菊池神社は、この菊池氏一族の忠臣をまつゝたお社である。

藤原忠平……武房―時隆―武時―武重
　　―武敏
　　―武光

第四十六　吉野朝京都へ御還幸

尊氏の無道

細川賴之が義滿をたすけた

後醍醐天皇が、吉野に朝廷をお開きになつてから、後村上天皇、後龜山天皇にいたるまで、五十七年とゆう長い間、楠木正成、正行、新田義貞、同義顯、北畠親房、同顯家等の忠臣が集つて誠心こめてお仕えしたのであつたが、いつも南風が競わないで、次から次へと戰死して、次第〳〵に衰えた。

しかしいくら衰えたといつても、吉野朝は立派に吉野に根强く傳つていた。

京都の方では尊氏が、後醍醐天皇からおてあつい恩賞をいたゞきながら、その御恩を忘れて、朝廷にそむき、忠義な人々を殺しおそれおうくも皇族を害しもうすようなことさえした。そのうえ兄弟互ににくみあい。はては弟の直義を毒殺してしまつた。部下の將士もたび〳〵そむいて、いつもさわぎがたえなかつた。そのあいだに尊氏は死んで、子の義詮から孫の義滿の代となつた。

義滿が年十歲のとき、父義詮はおもい病にかゝつたので日頃信賴していた。細川賴之に遺言して、義滿をたすけ導かせることにした。賴之は、足利氏の一

後亀山天皇が京都へおかえりになつた

族ではあるが、至つてつゝしみ深い人であつたから、義満のそばにつかえている人々には常におごりをいましめ、またわがまゝな大名をおさえるなど、誠心こめて、その主をたすけた。それゆえ足利氏の基はだん〳〵かたくなつた。

義満は、やがて使を吉野の朝廷へさしあげて、どうか天皇に京都へお歸り下さるようにとお願いもうしあげた。すると第九十九代後亀山天皇は、ながい間の戰亂で、萬民がくるしんでいることを、ふびんにおもつていらつしやつたので、たゞちに其の願をお許しになつて京都へおかえりになり、三種の神器を第百代後小松天皇におつたえになつた。ときに紀元二千五十二年西暦一千三百九十二年で、こゝに目出度吉野朝は京都へ御還幸になられた。

第四十七　足利義満の僭上（天皇なおそれたてまつらぬわがまゝ）

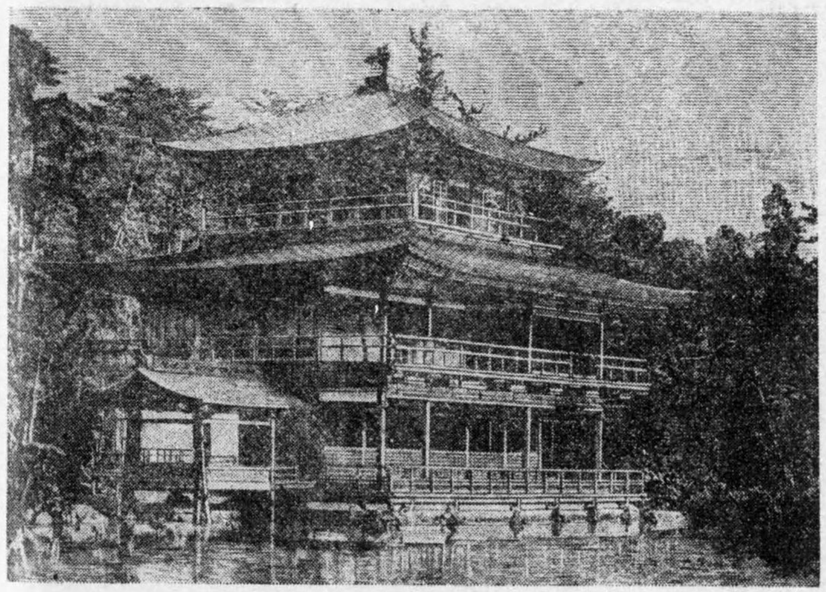
吉野の朝廷が京都へ御還幸になつて世の中はやつと靜まつたが、義満は、征夷大將軍となつて大いにいきおいをふるうようになり、ふたゝび武家政治の世となつた。義満は、まもなく將軍職を子の義持にゆずつたが、自分は、大政大臣になりたいとのぞんだ。武人で大政大臣に任ぜられたことは、平清盛からのちまつたく、れいがなかつたのである。それにむりにおねがいして、とう〳〵のぞみをとげた。このように義満のわがまゝは、しだいにつのり、はては奢の生活にふけるようになつた。室町の邸はあまり美しいので、人々は、花の御所といつた。さらに別荘を北山に造り、庭に三層樓をたてゝ、壁も、柱も、天井も、みな金箔ではりつめた。人々は金閣とよんだ。義満は髪をそつてこゝにすみ、なお政治をとつていたので、朝廷の官吏もみな、義満の威勢におそれて、この別荘にきて命令をうけるとゆうありさまであつた。

義満は勢にまかせて、いよ〳〵我まゝな行が多くなつた。かつて比叡山にのぼつたときなどは、關白以下の公卿をしたがえて、おそれおうくも上皇の御幸

義満がおごりをきわめた

金閣

義滿が國體をかろんじた



金閣

の御儀式にまねたほどであつた。

このころ支那は、元がほろんで、明の時代となつていた。義滿は使を明にやつて交際をはじめたが、明主が義滿をさして日本國王といつても、義滿は、べつにはゞかるようすもなく、自分からもすゝんで、日本國王となのつて、書をおくつた。日本には、天皇のほかにまた國王があろうか、義滿のおこないは、じつに日本國體を恥しめたとゆうべきである。

義政が政治を怠つた

第四十八　應仁の亂

汝や知る都は野べの夕雲雀
あがるを見ても落つる涙は

これは十一年間もながいあいだつゞいた、應仁の亂のために、京都は幕府をはじめ、社も寺も、民家も大方やけてしまつて、花の都も草が生茂り、雲雀が空高く囀つて、荒れはてゝいるさまをなげいた歌である。

義滿から四代たつて、義政の代となつた。義政は九歳で家をついで、まもなく將軍となつたが、すこしも政治にこゝろをかけなかつた。たま〳〵大風や洪水があつて、五穀がみのらないうえに、惡病がはやつて、人民が非常にこまつているのに、義政はいつこうあわれみのこゝろがなかつた。かえつて大金をかけて、さかんに室町の邸の普請などをしたので、第百二代後花園天皇は、たい

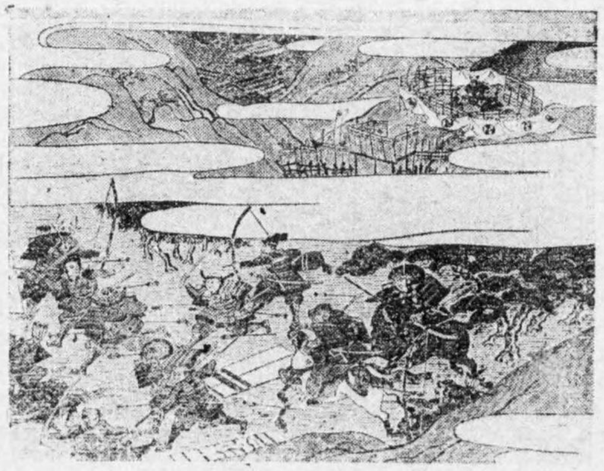
そう御心配になつて、これをいましめられたので、義政もおそれいつて工事をやめさせたが、なおたび〳〵花見の宴などをひらいて、奢にふけつた。それゆえ、費用がたらず、人民からたくさんの税をとりたてたので、人々のくるしみはます〳〵つのり世のなかはいよ〳〵さわがしくなつた。

足利家の相續爭

義政は、三十歳ぐらいになると、はや政治にあいてきた、けれども、まだ子がなかつたので、弟の義視を養子とした。そうして義視に將軍職をゆずろうとかんがえ、細川勝元にこれをたすけさせた。このとき義政は、こののちたとい子が生れても、けつして義視をしりぞけるようなことは、しないと、かたくやくそくした、ところが、まもなく實子の義尙がうまれると、その母はどうかして義尙をたてようとかんがえ、山名宗全が勝元におとらぬ勢があつたので、義尙をたてのんだ。足利家の相續のあらそいは、そこで細川氏と山名氏とのあらそいとなつた。

細川勝元と山名宗全とが對立した

紀元二千百二十七年、西暦千四百六十七年第百三代後土御門天皇の應仁元年に、勝元も、宗全も、めい〳〵味方の大軍を京都によびあつめた。そうして勝元は、室町の幕府に入つてこゝに陣をとり、その兵はおよそ十六萬。宗全の陣は其の西にあつて、その兵はおよそ十一萬であつた。それから兩軍は十一年のながいあいだ戰つたが、そのあいだに、宗全や、勝元はつゞいて戰死し、のちには兩軍の將士らも戰爭にあいて、しだいに國々にひきあげていつた。京都のさわぎはそこではじめてしずまつた。世にこれを應仁の亂とゆうのである。



應仁の亂

かような大亂のなかでも、義政はなお奢をやめず、のちに京都の東山に別莊をつくり、義滿の金閣にならつて、庭の中に銀閣をたてゝ茶の湯などの遊にふけり、むだに月日をおくつていた。それで幕府の財政はます〳〵くるしくなり、將軍の命令は、ほとんどおこなわれないようになつた。

- 一 足利義滿
  - 二 義持
    - 三 義量
  - 四 義教
    - 五 義勝
    - 六 義政
      - 七 義尙
    - 義視

第四十九　群雄割據

日本歷史の上で戰國時代とゆうのは、應仁の亂からのち、足利幕府のいきおいが、次第におとろえて、命令が利かなくなつたので、澤山の英雄が日本國中あちら、こちらにあらわれて、それが互に戰爭をしあつて、およそ百年の間つゞいた。この時代をゆうのである。

この百年の間は、强いものが、弱いものを亡ぼして、勝手に領土をとりあいして、國々に割據した。

そのなかで一番勢力のあつたのは、相模の北條早雲其の孫の北條氏康。それから甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信、安藝の毛利元就などで、最後にそうした澤山の英雄を平げて大體、日本國中を平定したのは、織田信長である。

第五十　北條早雲と孫の氏康

北條早雲は、はじめ伊勢にいたので、伊勢新九郎といつた、うまれつき悧巧で、馬に乗ることや、劍術がすきであつた、はやくから家を興そうとかんがえて、六人の勇士をひきつれて、駿河の今川氏に賴つていたが、その頃東國がたいへんみだれていたので、伊豆へ攻め入つてこれを取り、北條にいた。そうして惜しげもなく金錢をまいて、人民をなつけた。

つゞいて相模をとろうと、かんがえ、使を小田原城にやつて、鹿狩といつわつて、箱根山をかりうけ大勢の兵士を獵師の姿にかえて、山に入りこませ、不意に小田原城にせめよせた、このとき早雲は何十頭の牛の角に松明をつけて、夜襲をした、その灯を見た、城主上杉家の方では、大變にあわてゝ、逃げさつたので、早雲はやす〳〵と、城をうばつてこゝにうつゝた。それからおい〳〵に相模をしたがえて、勢を東國にふるうようになつた。

早雲の子の氏綱は、父ににて勇武なひとで兵を武藏にすゝめ、上杉氏をやぶつて江戸や川越などの城をおとしいれた。氏綱の子の氏康は、十二歳のころまでは、たいへん臆病であつた、のちこれをふかくはじ、おういにいくさのことをならつて、とう〳〵勇氣のあるりつぱな人となり、父のあとをついで、ます〳〵いきおいをさかんにした。

この頃、上杉朝定や憲政らが、川越城をとりかえそうとして、八萬の大軍をひきいてせめよせた。北條氏の將はかたく城をまもつて、半年ももちこたえたが、その中城中の兵糧がだん〳〵とぼしくなつた。そこで氏康はみずから小田原からたすけにいつたが、其の兵はわづかに八千ぐらいの小勢であつたので敵の大軍にはとうていむかうことが出來なかつた、そこでわざと仲直りをもうしこんで、敵にゆだんをさせ、夜中に急にせめよせて、おういにこれをうちや

氏康はよく國を治めた

ぶつた。

このとき朝定は戰死した。憲政は、いつたん上野ににげかえつたが、ほどなくまた氏康にせめられて、越後へはしつた。

これからのち、氏康はます〳〵他の國々をせめて、おういに領地をひろめた。氏康は戰が上手なばかりでなく、國をおさめることもすぐれていて、つね〳〵部下をかわいがり、よく領内の人々をめぐんだ。それゆえ、人々は、みな氏康になつき、他の國々からもその政治をしたつて、われさきにと、小田原にあつまつてくるものがおうかつたと、ゆうことである。

早雲が起つてから、およそ六十年ばかりで、其の領地は、伊豆をはじめ、相模、武藏、上野などの國々にまでひろまつた。

第五十一　上杉謙信

謙信のおいたち

北條氏と肩をならべて、強かつたのは、越後の上杉謙信である、謙信はもと長尾氏で、平氏の出である。その家は代々上杉氏に仕えて、越後にいた。謙信は父爲景の二男である。

うまれつき大膽でたいそう勇氣があつた。父の爲景は謙信が十三の時越中で戰死した。その時謙信は、味方を引きかえして敵と戰おうとしたが、家來に諫められて、落ち延びることになつたが、その間に敵が大勢謙信のいる家に攻めよせてきたので、家來は謙信を床下にかくしておいた。夜中になつて敵が去つたので、そつと床下をみるとぐう〳〵いびきをかいて眠つていたので、みんなその大膽なのに舌をまいて驚いたとゆうことである。

父が戰死して、兄の晴景が家をついだが、柔弱（めゝしくてよわい）であるため、とかく部下にかろんぜられて、國中がたいへんみだれた。そこで謙信は、僧となつて他の國々をみてあるき、やがて越後にかえつて兄にかわり、國内の

亂を平げて、すゝんで近國をもしたがえ、そのいきおいはなか〳〵さかんになつた、のち上杉憲政が北條氏康におわれて、謙信をたよつてきたとき、その家名をくれたので長尾氏をあらためて、上杉氏を名のることになつた。これから謙信は憲政のために、たび〳〵兵を關東にだして、北條氏とたゝかつた。あるときなど、はる〳〵小田原の城下ちかくまで、せめよせたことがあつた。敵は謙信の武勇におそれいつて、途中一人として、ふせぐものなく、まるで無人の原をゆくようなありさまであつた。

小田原にせまつた

第五十二　武田信玄

信玄のおいたち

甲斐には武田信玄がいた。その家は甲斐源氏といつて、新羅三郎義光からで、代々甲斐の領主であつた。

信玄がまだ勝千代といつて幼い頃、あるとき木馬にのると、その木馬が聲をかけて、「若様どちらへ參りましよう。」といつたので、勝手代は物もいわず、いきなり帶びた刀を引抜いて、ずばつと切附けた。キャッとゆう聲がして怪しの物が消えて逃げた。血の滴つた跡をつけさせると、洞穴の中に年をとつた狸がうめいているので、直ぐ退治させたとゆう話がある。

十六歳のとき、父の信虎にしたがつて、信濃にせめいつた。信虎は八千の兵をひきいて攻めたが、敵はかたく城をまもつて、なか〳〵くつたくしなかつた。ところが信玄は、わずかに三百の小勢で謀をめぐらし、不意打をして、城をおとしいれた。ほどなく父にかわつて、よくその國を治め、またしだいに信濃を攻めとつたから、信濃の村上義清は、越後に逃げて、謙信に助を求めた。

信濃をとつた

これが有名な川中島の合戰の起つた原因である。

第五十三　川中島の合戰

鞭聲肅々夜過河　曉見千兵擁二大牙一
遺恨十年磨二一劍一　流星光底逸二長蛇一

（川中島の合戰に謙信の軍は鞭の聲もしずかに夜河を渡つて。曉に大兵が信玄の旗（大牙）をまもつているのをみた。謙信は多年の怨を晴らそうと劍をみがいていた。やつと信玄にめぐり合せたが、僅のすきに逃してしまつた。）と賴山陽がうたつた。

戰國時代の戰いの中でも、一番名高いのは、この川中島の合戰である。

謙信は、村上義清の賴みをうけて、たび〳〵信濃に攻めいつて、川をはさんで、信玄の軍といくたびも戰つたが、どちらも強い大將であつたから、なかなか勝負がつかない。あるとしの秋の戰いに、謙信が、一萬三千の兵をしたがえて、川中島に陣をとつていると、信玄は、二萬の大軍をひきいて、これをはさみうちに、しようとした。謙信は、たゞちにその謀をさとつて、夜ひそかに川を渡り、不意に信玄の陣に攻めいつた。このとき謙信は、白い布で顏をつゝみ、馬に跨がり、三尺ばかりの大刀を拔きかざし、信玄めがけてきりつけた。信玄は刀をぬくひまもなく、もつた軍配扇で受けとめたが、これも切り折られて、肩先に少し傷をうけた。今一刀切り下そうとした時、信玄の家來原大隅槍をのばして、謙信の馬を打つた、馬は

川中島の合戰

謙信が敵に鹽をおくる

信玄は望をとげないで死んだ

謙信も目的をはたさないで死んだ

驚いて棒立になつた。其のひまに信玄はやつと虎口をのがれた。

かようにして、ながい間、その勝敗はきまらなかつた。謙信は、信玄とこれほどはげしく戰つていても、甲斐の人民が鹽が不足して、くるしんでいることをきくと、「爭うところは弓矢であつて米鹽ではない。」といつて、越後からわざ〳〵鹽をおくらせた。人々はその義理のあついのにふかくかんしんした。

謙信と信玄は、折さえあつたら、京都へのぼつて日本中をおさめようと、のぞんでいた。そのため信玄は、さかんに近國をせめとり、はては駿河をあわせ、遠江にすゝみ、さらに三河にいたつたが、たま〳〵病にかゝつて國に歸る途中でしんだ。

謙信はこれをきいたとき、食事中であつたが、おどろいて箸をおとして「よいあいてを失つた。」といつてたいそう惜しんだとゆうことである。

謙信もまた、越中や能登などの國々をとり、大兵をひきいて、いよ〳〵京都へむかおうとした、ところが、出發まぎわになつて、急病でしんだのでとう〳〵その目的をはたすことが出來なかつた。

謙信が、越中、能登を征伐したとき、陣中で諸將をあつめて、宴をひらいたときに、自分で詩をつくつて、

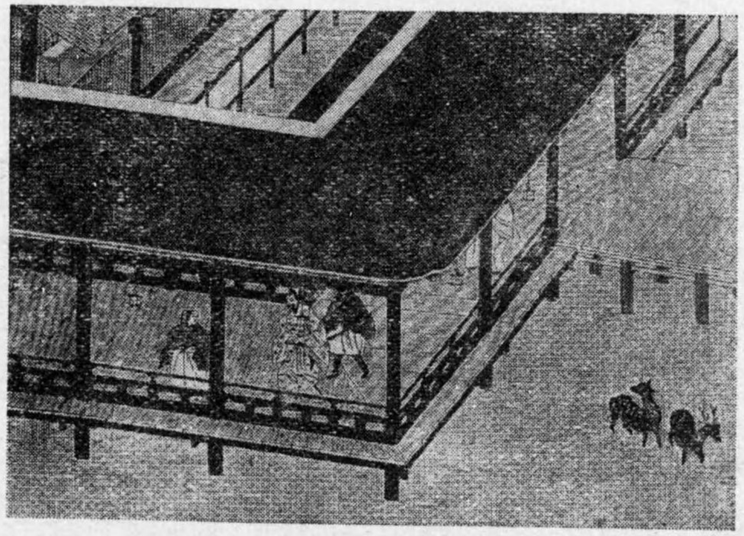
霜滿三軍營一秋氣清　數行過雁月三更
越山併得能州景　遮莫家鄉憶二遠征一

（霜は陣中に滿ちて秋の氣分がすが〳〵しい。ま夜中の月が天に輝いて數列の雁がとんで行く。越中と能登とを平定したが、鄉里に殘つている人は、遠征の身の安否を心配しているだろう。）

第五十四　毛利元就

元就は幼いときから、大きな志をいだいていた。十二歳のとき、嚴島神社

元就のおいたち



毛利元就が嚴島神社に參詣したとき、

に參詣したとき、從者が何ごとか、いつしんに祈つたのをみて、「なにをいのつていたのか。」ときいた、すると從者は、「若君に、中國をたいらげさせて、いたゞきますようにと、いのりました。」とこたえた。すると元就は、「お前はなぜ天下を、たいらげさせて、いたゞくようにと、いのらなかつたか。天下をたいらげようとこゝろざしても、やつと中國ぐらいしか、とれない。中國を平らげようとこゝろざしたのでは、どうして中國をとることができる

か。」といつておういにいましめたと、ゆうことである元就は成人するにつれて知力も勇氣もともにすぐれ、またたいそう部下をかわいがつたので、人々は、みな心からなついた。

毛利氏は大江匡房の子孫で、その家は代々安藝にあつて、元就は周防の大内氏に仕えていた。

大内義興は、數ケ國を領して、たいへん富强であつて、その城下の山口は、京都をしのぐ程にぎわつた。これにひきかえ、そのころの京都は、おういにおとろえていて、朝廷でも御費用がたらないので、第百五代後奈良天皇は、ひさしく御即位の禮をおあげになることも、できないような、おそれおうい御有樣であつた、このとき、義興の子義隆は、その御費用をさしあげて、忠義をつくした。けれども義隆は、富强をたのんで、しだいにおごりにふけり、軍備をおこたつたので、しまいには其の家臣である陶晴賢に害された。

元就は主人の仇を報じようと、日夜苦心し四年の後、嚴島に城を築いて、晴賢の軍をこれへおびき出し、元就は精兵三千ばかりをひきい、隆元、吉川元春、小早川隆景の三子とともに、大風雨の夜にまぎれて島におしわたり、船は殘らず返して、決死の勇をふるつて、急にその陣に攻め入つた、不意を討たれた晴賢の大軍は散々に破れて、晴賢は遂に自殺した。世にこれを嚴島の戰といつている。

元就は、そのいきおいでたちまち周防や長門などの國々をとつて、大内氏にかわつた。また兵を出雲にだして、尼子氏と戰つた、尼子氏には山中鹿之助幸盛などの有名な部下があり出雲、隱岐、伯耆を領して其の勢が盛んであつたけれども、富田城を七年もの長い間かこんで、とう〳〵これをしたがえてしまつた。

そこで、毛利氏は、中國や、九州で十箇國あまりを領することゝなり、大内氏よりもはるかにつよくなつた。けれども元就は、すこしもおごる心がなく、よく大義をわきまえて、第百六代正親町天皇が、御即位の禮を行わせられるときには、その御費用をさしあげて、忠義をはげんだ。

御即位の費用をさしあげた

またあるとき自分の子供三人を呼んで、三本の矢でも一本づゝならすぐおれるが、三本一緒にすればなか〳〵折れるものでないから、たがいになかよくたすけあつて、毛利家をまもつていくようにと、ねんごろにいゝきかせた。

隆元は、父に先立つて死んだので、その子輝元が家をついだ。元春、隆景の二人は、心を一にしてこれをたすけたので、毛利氏は元就の死んだ後でも、そのいきおいは、すこしもおとろえなかつた。

平城天皇……大江匡房……廣元―毛利季光―弘元―元就―
―隆元―輝元
―元春（吉川）
―隆景（小早川）

公卿のくるしみ

朝廷が衰えられた

第五十五　京都の疲弊

戰國時代となつて、幕府の權威が失なわれてくるとともに、朝廷もだん〳〵衰えさせられて、皇室の御費用もたらなくならせられたので、朝廷の御儀式も大方すたれて、行なわせられぬようになつた。公卿のうちでも、縁をたよつて地方へくだるものが多く、京都へのこつているものは衣食にもことかぐ程であつた。あるとき身分のある公卿に面會をもうしこんだ人があつた。そのひとは、「この寒いのに、なつのきものでは面目ないから。」とことわられたので、「いやそれでも結構です。」といつて、あつてみると、公卿は、素肌に蚊帳をまとつていたそうである。當時の公卿がどんなに、あわれな、くらしをしていたかは、このはなしからでもおしはかることができる。

おそれ多いことであるが、天皇がおかくれになつても、幕府が御葬儀の費用

後奈良天皇は儀式の御再興をはかつた

天皇の御仁德

を四十日も獻ずることが出來なかつたり。御即位の大禮を十年も二十年もおのばしなされたり。御所の塀がやぶれて、宮中の御あかしの光はとうく三條の橋からみえたといわれている。

後奈良天皇は、このようにとぼしい御費用のなかからも御儉約なさつて、なかいあいだすたれていた朝廷の御儀式を御再興になつた。ことに天皇は御あわれみの御心の深い御方で、すこしの貢（臣下から天皇にたてまつるもの）でもさしあげるものがあると、これをすぐ皇族や公卿におわかちになつた。

また日頃大御心を萬民のうえに、おそゝぎなさることもひととうりでなかつた。ある年長雨がふりつゞいたうえに、惡病がはやり、そのためにおうぜいの人が死んだ。天皇は、これをふかく、御心配になつて、御みずから經文をうつして國々におくだしになり、そのわざわいがとれるように祈らしめられた。

天皇が御身のおくるしみを、すこしも、御心にかけられず、たゞ一心に萬民